

Pensoj flugas trans la land-limon No.389 THE SENRYU ZASSHI 11月本社句会・

K 兼題二 X. 梅

川柳雜誌社主催

本社十月句会

話

題

題

賞

幹

事 紫杏・淡舟・いさむ・潮花・欠秋・庸佑・狂二・

与呂志・白木・木堂・月都・薫風子・水断・

一投句だけの方は郵券三十円

同封(必切九月十

費

題

所

時

さあ、句の俵富士を積まんかな

五年連続の豊作ですが、私たちは

田を作るより句を作れでいきましょう。

月 十二日

月

後

大

時

市電日本橋一丁目電停北へ百米西側市電道領堀電停南へ二〇米西側 (入口は右側から階段を上ってください) 座 别 館

1: 井 本 文

真 意 郎 客 蝶

選 選

当日発表 Fi 古

不 村 洞 賞 方

阪市住吉区万代西五丁目廿五番地 誌 社 句 部

JII

雑

電·住

位

みんなが着て みんなに 喜ばれている

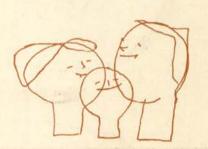
倉敷 ピーロン 学生服

学生服用として特 別につくられた丈 夫で着心地のよい ビニロンが使つて あります

倉敷レイヨン株式会社



家そろつてホーライ党



東 料



大阪なんば。TEL @ 551-2

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

山 あ 山 妻 法 志 高 音 7 0 2 賀 を 資 痴 原 対 話 to 高 6 高 0) す 2 12 俗 原 す 原 霧 化 世 から Ш 15 見 ~ 0 ス Ł b 何 る す 枚 仕 0 女 から n から 撮 事 ス 車. Ш 12 0 \$ た る ts 賊 IJ K 云 も る 平 2 \$ ル 0 わ n 3 旅 to 唄 ٤ 6 50 黄 ま な 味 4 to 1) 昏 3 れ < わ ts け から \$. ま to 1) n K 世 る



奥信濃にて

-- 九五九年·十月-

奥

信

濃

空

気

0

味

も

味

お

5

た

十月号目次

ベンの散	柳界展	社の無	不朽洞会か	各地柳	金泥	一路第「倉	近作柳	同舟近	川柳	*	上下のへだ	丹波栗の独り		A PONT	七五五	個性と私		武失部の		In this	川柳今昔物	-	何会のことなど	主幹御夫妻を囲	とう	奥信濃の 不朽洞句: ※ の 新 ・
歩	里(語)	板() ()	ち(量)	捷	集麻生葭乃選:(20)	ル」水谷竹荘選…(三)ル」浜田久米雄選…(三)	北川春巣選…(三〇)	豚 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	塔麻生路郎選…(穴)		三栗	看	んたく…			薫湖 五山	なし東野 大	氏不二田三夫…(云)	況伊志田孝三郎…(云)	義に戸田 古方…(三)	語·······山路 閑古···		清水 白柳…	を囲んで金子 呑風…(量)	花麻生 葭乃…(吾)	旅



志賀高原

紫痴郎氏の無心庵を訪ねて

麻 生: 路 郎

川柳への巫教苦闘を続けて来た。今では外孫と合せて孫が二 うと思つた。お互にもう心のおけない友達のような仲ではあ 出来ないのが私達夫妻だ。むしろ人生はこれからであると思 にはもう子どもが出来ていた。それから息も切らずに四男五 夫妻は挙式がすむとすぐさま、生活戦線に放り出され、翌年 でも、新婚旅行をするものは稀れであつた。そんな訳で私達 ところがわれわれの結婚した大正三年頃は、相当の金持階級 つているので、近とろ流行る新婚旅行から再出発をして見よ 人。それが人生だよと云われそうだが、そんな人生には風服 女や儲け、十八年間物手におむつが闘つていた。そんな中で 近ごろは挙式が済むと、その場から新婚旅行に出かける。

い。妻が多年あこがれていた信濃を選ん 行き先は箱根でもなければ熱海でもな

後を養うために、良寛の無心の文字からと 信州の畏友中島紫痴郎氏から老

つは素晴らしい新婚旅行が出来そうだ」と

品よく踊っていた。講習が終ってから、夜

た。心なしか、日舞の好きな妻が、一ばん

ので、夕食をそこそこに打ち切り参加し

で、この手紙をベッドで読んだ私は「こい

これは私達夫妻にとって願ってもない好条 件だった。事ごとにお辞儀を繰り返えさね しでもとる気だったら、遠慮はいらぬから とは出来ない。夫婦で自炊をするか、仕出 自適どころか隠居所は出来たが仕事が忙し 出て来たらどうだという手紙をもらった。 もよいが、仕事が多忙でかまってあげるこ んなら遊びに来ないか、いくらいてくれて いので、ゆっくり休んでいる暇がない。な べ、心からの祝辞を送ったところが、 た。私は早速、君の悠々自適の姿を思い浮 って無心庵を建てたという報らせがあっ ばならない生活にはゥンザ リして いるの 悠々 りの講習がはじまりますと知らせてくれた

なる旅への前記である。 備にかかった。ここまでが新婚旅行一静か の循高蔥風子、林宏子の両君が見近つて異れた。名古騒へ着 九月三日の朝、近鉄の上六から発つたことにした。編集部

も特に寒いところらしい。

出すという話だった。木曽福島はこの辺で

とにしていた。それで今度の旅には出来る を渡った。かなり重かったが、旅に出たと らぬので二人は手分けして荷物を提げ陸橋 二人でビールを二本あけた。女中が木曽踊 が老人向きの料理で、何一つ残さなかっ が気をつかってくれたのであろう。すべて た。夕食は花嫁花婿ではなかった。料理人 は大阪で冷房した部屋にいる涼しさであっ 阪では残暑が厳びしいというのに、ここで で中継的に泊まることにしたのである。大 だけ慎重な態度をとった。それが木曽福島 組んでいたので旅らしい旅は一切しないこ た。私は一昨年の十月六日、失語症失書症と なかった。旅館つたやは川添いの家だっ いう解放された心には、さほど苦にもなら のが、十六時五五分だった。赤帽が見つか いう変な病にとりつかれながらも静養らし た。妻はわらびのおしたしをよろこんだ。 い静養も出来ないまま、多忙な仕事と取っ ここから国鉄中央線で木曽福島へ着いた

妻にも語り、九月号の発送がすんだら出か けるとの予定日だけを知らせ、セッセと準 歩いただけで引返えした。浴衣着では一寸 帯のように長い街の賑やかなところを少し の木曽福島の町を宿の浴衣のまま歩いた。 寒かった。ここでは九月の末にはコタツを

作っていたのにとか、話題はそれからそれ 漢字がなかなか合わない。妻は次の駅を標 て三重県に疎開していた時には畦にだけ ら見る畑のものに眼をとめた。ここらはア 示したカナを見てはそれに漢字を当て嵌め ことまで愉快でもあり、 じめて見たのであった。旅は何んでもない いた。妻はりんごが樹に生っているのをは ごの樹だと知った妻は驚異の眼をみはって っていた。あの埃りっぽい葉の樹が、りん いに作ってあるのはどうしてでしょう。 カシャが多いとか、とうもろこしが畑一ぱ はえみを見せた。それにも飽くと、車窓か て興がった。巧く当たると、花嫁らしいほ た。中央線の駅名は変っているのでカナと た。青いりんごや赤いりんごが鈴なりに生 ばが多くなった。それはりんごの樹だっ と、急に、車窓に埃りをあびたような葉っ へと尽きなかった。列車が長野県に入る 翌四日の九時五二分に木曽福島を発っ 発見でもあっ

中駅に着くのであるが、美人の女車軍の顔を眺めているうち 席番号を見て座席へ案内してくれる。四十分間で終点の湯田 てくれないだけに杭てて帰る必要はない。美人の衣車家が座 の外に座席番号の入った柴車券と二枚の切符がなければ栗せ 列車が長野に着くと、ここから長野電鉄に乗り換えた。こ 居間と書斎であった。居間には南北の額が

に着くと言つてもいいだろう。ここらでこの常鉄の社長のア

行った。古風な医院であるが、庭内には自 然木が林立している。 湯田中へ着くとすぐに俥で、中島医院へ

大きな口をぱくぱくと開けている。 ある鯉がつかめる程の距離に群がってい り、その山水が流れ込む池には二尺余りも に出た。隅にはナイヤガラ風の瀑布があ 下に悠々と日向ぼっこをしていたという庭 ぐに、故蛭子省二氏が五ヵ月もいて庭の樹 それほど、お互いは理解し合っていた。す る。紫痴郎氏の足音をきくと皆寄って来て 氏の診察がすむまで暫く炉辺で待った。 た。別に初対面の挨拶は交わさなかった。 診察がすんでから紫痴郎氏があらわれ 先ずテル夫人にお目にかかった。紫痴郎

ゴミゴミした都会生活者にとっては全く別 と紫痴郎氏が池のハタに立って話される。

可愛いものですよ

と言って、俥をよばれた。 「じゃァ、これから無心庵へ案内しよう」

寸弱ったが、温泉につかりに行く以外は無 て苦にもならなかった。二階が紫痴郎氏の 心庵の二階に寝転んでいればいいので大し 眺望は絶佳だった。幾曲りかの階段には一 附近は樹木に覆われていたが、二階からの 先の安代温泉の丘の上の独立家屋だった。 のとばかり思っていたが、俥で五分ばかり 無心庵は湯田中温泉の中島邸内にあるも

読まない静かな生活がはじまった。日の暮 かかっていた。一階は茶室と台所、地下室 う漬物の大根や胡瓜を切ってくれて一緒に 夫妻へ提供されたので着くとすぐに新聞も で大阪あたりでは喰べられないものだ。来 ビールを飲んだ。それはすべて新鮮その物 い顔をしてやって来られ、自ら漬けたとい は温室になっていた。それ等の全部を私達 になると診療を終えた紫痴郎氏が屈託のな

りんどうの花

生 葭 乃

大阪をたちのいて目にも立たない

信州リンゴ八等身の案山子立て

りんどうにときめく胸は処女のも おばすてに鳥が減って汽車が着き 志賀高原

ツキはまたたび「信濃の華」を没 山賊も出端を失うバス通る

珍中の珍だった。 紫がかったとうもろこし、またたびなどは る度に珍らしい突出しを持参された。 黒く

築でタイル張りの清潔な温泉だった。誰も ろにあった。小じんまりとした近代的の建 安代温泉は無心庵から半丁ばかりのとこ

国だと思った。 盗られる憂いもない。入浴時間も制限なし 番をして居ないので湯銭もとらない。衣類 である。湯加減も非常によかった。温泉天 や下足などは湯槽で洗いながら見えるので

吸うた。それに無心庵には微塵埃りという ものがこれっぱかしもなかった。庵主がそ のかたなど少しもなかった。 れを自慢して机や床の上を指で拭いて見せ が、とにかく、こころよく意識して空気を には匂いがあった。オゾンの匂いだそうだ たが、拭う前も拭ったあとも同じことで指 温泉ばかりではない。ここ奥信濃の空気

の柳友に会えたことは望外のよろこびであ った。「山」「女」の二題が課され、山は 氏が出された同文電報で集られた信濃各地 日は奥しなのの主催の歓迎小集句会があっ た。川柳を離れての旅であったが、紫痴郎 私達がゆっくり滞在しないと知って、六 しない収穫であつたが、スペースがないので省略する。 翌五日は私たち失妻で、志賀高原に遊んだ。これは予想も

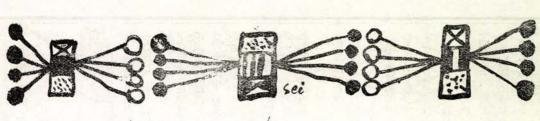
だったという。遙かなる旅の とをフト耳にしたが半信半疑 支部の永尾永断君が駈けつけ て来た。長野市で開かれた国 けた。宴半ばに、川雑大鉄局 案の志賀杯で、信濃の華を傾 もした。あとで紫痴郎氏者 私の選、女は葭乃が選をし 奇遇をお互いによろこんで甘 た。のぞまれるまま私は柳話 鉄の全国川柳大会で私達のこ

> 6 て行ったという話などは面白かった。二人 た。それは尊い後姿であった。 頃、電話があったので、七十八歳の老医師 の性格がよく出ているからである。廿三時 だ。上へ寿の字を書いたらうつると云った が、こんなのは画ではない。これはピラ た。久良伎が画を持って来て買えと云った 々としてあらわれ、ビールを飲みながら陶 った。診療の終った紫痴郎氏が例の如く瓢 た。志賀焼の揮毫もした。夕べから雨にな 三時頃まで飲んだ。翌七日は終日揮毫をし 器のこと、書画のことなどで雑談を交わし は往診のために激しい雨の中へ消えて行っ 久良伎が怒って、画をひき破って帰っ

物をまとめ、汚れ物や着類などは小包にして満温泉の郵便局 いよいよ引きあげる八日の朝を迎えた。土産をもとめ、荷

の中島医院へと向った。 に、イヤ来年も又来るよと云いに、湯田 である。俥を呼んで貰って、別れをつげ 雨はすっかり晴れ上った。 再び旅行日







西宮市 若本多久 志

おしぼりをキッチリたたんで借る話

▼聞いているのかハンカチ小さく折り 素人に見えるでしょうと逢いにくる ラッキーセール当らぬ筈のくじを引き ビャガーデン女の方が二杯飲み いちじくが歯に巡む秋を知らされる

大阪市 正 本 水 客

水を飲む音こころよき音のうち 余韻のない笑いが自分でも分り 水害の駅にスポーツ新聞売れ残り

大阪市 丸 尾

潮

花

ハイヤーで送ってバスで帰る恋 まだ雨に濡れた柳の葉をむしり 電燈を消せと花火の子がせがみ

教養の至らないのがスト強く はったりのうまさに借金引受けた

大阪市

西

UN

to

を

週末列車煙草もうまい軽井沢 息してりゃ税金のいる世なりけり

雨を聞くゆとり療養板につき

狂人のつぶやく声に虚を突かれ 性に合うてますと浪曲聞いており

青い空女は直ぐに洗濯し ホノルル 砂 旋 風

子が病めば母の勤めが狂いだし

公私多忙云うてて会えば飲みあかし

時間外女医は割烹服でいで

絵の稽古です妻そそくさと出掛け

大阪市 須 崎 豆

秋

冷蔵庫トマトは隅へ放り込まれ 何時死んでもいいよう髭を剃って出る 奥さんを恐い同志が飲み歩き 道問えばおっさんえらいつんぼなり

ワイマル 羽 佐 間 柳 樂

落ぶれて親類頼る愚を悟り 聴診器外して医者は年齢を聞き ハイボール四畳半には向かぬ酒

奈良県 尾 崎 方 Œ.

それ程の髭でないけど刃を研がん

相性がどうであろうと晩婚の 生きられるだけはと子等の気も知らず 市 吉 田 韭 井

堂

仏滅をさけて入院する弱さ 雲仙も箱根も知らず孫の守り

赤電話すぐ鼻先で甘えられ

トラックを気狂いと思う日が続き

大阪市

太田

良

子

大阪市 武 部 香 林

お灸も良いでしょうと院長こだわらず 愛妻を育てた田舎の景を褒め 岡山県 直原 Ł 面

信任が厚すぎて娘に手が出せず 故里の空気切なく胸にしむ 大阪市 西 森 花

払いともない気持税吏もよくわかり 日本人どこかへ帰還したくなり 扇子売場やはり冷房きいており ジェット機の爆音税の消ゆる音 エエとこでヒルムが切れたように逝き 特売場ゴムまりみたいに妻弾み 穴あいたゴムまりに似て平社員 イヤイヤが言えてイヤイヤばかり言い

別府にて

鳥取市

H

人間の懲は血の池地獄染 海地獄泳ぎたいよな気にもさせ

野 井

防府市

rhi

木 摩

天

郎

蛙

山登りと別に夫婦は温泉につかり

大阪市 木

村

水

堂

へそくりの額を女房かぎつかれ

フとアイク行ったり来たりするそうな

加賀市

野

村

味

Y.



岩を噛む流れ見下ろす野天風呂

大阪市 真 鍋

宮城を見下ろす塔の上に居り

倉敷市

木

村

千

容

東京にて

嫁ったかて働きますと敷く下地 じゃによってあんたも客附をせよと云う

保護色もなく大木の枝にすみ

鼠でも出ればと思うほど淋し

或るときは意地を張り合うのも夫婦

倉敷市

田

垣

方

大

✓ 云うてしもうてああわざわいのもとだった

大阪市 佐 野

儲かって社長も作業服をつけ 黒眼鏡人の流れを切ってゆき

はいれたらボロ会社だとうそぶいた

秋の風ガラス食器はあわれなり

兼務して毎日二兎を追い続け

子のために夫のために生きんとす

薪能右とひだりに写真班

共稼ぎ針が錆びてるのに気づき

子供より飼育しやすい夫を連れ

Ţ 路

大阪市 Щ

Ш Sol

茶

瓢

病んでさえ二号夫人の絢爛さ 御寮人こせこせこせと胃が弱く

水

僕と子と二代教える師の白髪 売薬如きを定価通りに売る場末

義妹を見舞う

大阪市 後 志

万年筆振らんと出ないようになり

米子市 小 西

雄

近松の型に篏らぬハイヒール パチンコ屋軍艦マーチで開店し

嫉妬して見たいと妻のいい機嫌

口ばかり達者な父の大掃除

高槻市

福

田

炎天で今日も出逢った霊柩車 豚児とは呼んでも晩成信じきり

お祭りの巫女は交代制で舞い チンドン屋最高気温にかづら着て

> 安物の時計のように更年期 自家用車買うたと久しぶりで来る 逃げ腰で子供が囲む呑んだくれ 本屋まで来たのに老眼鏡忘れ

大阪市

金

井

文

秋

献立の浮ばぬ智恵が目刺やく 加賀市 那 谷 光

郎

胸病んでいるからニンマリ笑うだけ チグハグの返事可笑しい祖母の耳 大阪市 北 111 巣

敷かれてる話を笑い笑いする 退職金の話になればよく喋り ポニーテール何年かかったのと訊かれ ジュースでは渇きとまらぬのどとなり

中元に来てひとしきり汗をふき 岡山市 浜 田 久 * 雄

夏やせを見事にやせたなといわれ 盆栽の趣味年寄りの部に入り

岡山市 逸 見 灯 竿

外遊の旅費蟇口にあらざりき

もう終る休暇へ宿題姉がする 特ダネを秘めてジョッキの味になり

出雲市 尼 緑 之助

夕顔に夫婦の思いは他郷の子 落ちつかぬ手紙煙草の灰が落ち

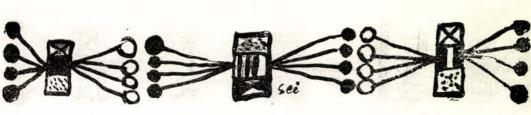
子に縁の薄い運命を気楽がり

7

品行方正学業優等スカン顔

福岡県天ヶ瀬温泉にて

大ジョッキ彼女の方が先に干し 平服で済まぬ葬儀の日の暑さ



大阪市 水 谷 竹

荘

誕生日鯛一匹を買いかねる

出しゃばりがすごみがかったのにあわて 鳥取市 杉

谷

湖

山

雨の日の広く淋しき運動場

京都市 大 鶴 喜 由

うたぐり深い人に嫁いだふしあわせ ホステスの料るに手間のかかる客

好きだとは言わず唇近づける

夏休み母あわてさす子のプラン 尼崎市 小 林 文

月

タイムカード課長の分は守衛打ち 奈良県 西 辻

竹

青

極秘だと言うて身元をしらべに来

岡山県 福 島 児

妻若し二人で鍵を見よと言う

外遊に漢方薬も持って発ち

岡山市

服

部

九

平

嫁き遅れ独身主義者の著書を買 お隣りへ金槌貸したままになり

兵庫県 若 林

草

右

優勝旗どろんこの方が持っていに

高校野球大会

台風へまたかと政府驚かず

台風米る

マスコミの時代医者にも世辞があり

スクーター後に恋が便乗し

岸さんが帰ってきましたマンガ欄 ルパングの勇士よ恩給ついてるゾー

広島県 Ш 田 季 賛

人の子をあやして子供まだ出来ず

そちらさまの言うようしますと言う月賦

大阪市 Щ 本 葉 光

相手次第で泣き言になりホラになり 岡山県 田 村 藤 波

田の草を嫁は妊娠腹で押

父母の在る間は家風守り抜き 意見する間も隠居蠅を打ち

岡山県 岡 田 夜 潮

奨めても二号と同じ柄を着ず 抱いた子へ風鈴吹いてまぎらか

涼み台みんな欠伸で別れたり

運転手さんアンタ独身かとたずね

岡山県 本

田

惠

=

朗

愛称のなるほど鶴を思わせる

岡山市

津

 \mathbb{H}

麦

太

楼

目の玉を揉んで雑文読みふけり 老夫婦の仲を一縷の牧遺香

真っ白いパンツが哀れ精薄児

熊本市 有 働 萊 春

元刑事ほり込んだ奴と出合うたり 吹田市

橋

本

幸

男

花咲けば遊びに来いともう言わず 市 高 崎

雄

声

栄転が借金払わず派手に発ち

ビル街で人間小さきものに見え

腕組んで見廻ってます守衛です

避暑行った夢でも見よう事務疲れ

島根県

藤

井

明

朗

宴なかばここらで幹事唄にする

岡山県

永

松

東

岸

保守党へ一票入れる金が出来 夕立ちの音も聞えぬパチンコ屋 恋も金あんたも悟りの悪い人

倉敷市

野 田 素 身 郎

産月へ妻に内緒の宝くじ 台風へまだまず里が気にかかり

大阪市 伊 達 堰 子

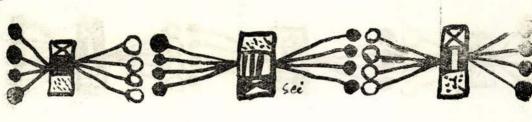
お袋にあまえたあんな頃もあり 出直した役所でこんどハンが要り

晃さんを祝う

お別れの横で駕屋は釘を選り

釜ヶ崎旗の出そうな句が生まれ

もう五十なのに王子になった夢 大阪市 不二田 一三夫



黒塀がここらにほしい三日月よ ロマンスが生まれるぞよと易が出た

P·R実物見本の阿波踊り 通動のホームへ鳩はおりてこず

兵庫県 井 0 かっ

平

四十男悩ますように腕が触れ

商工会音ばかりする花火上げ ハズの趣味よと洗濯は任しとき 情なさテレビ乞食に行く子供

大阪府 深 見 雅 堂

結論を言わぬ養子をはがゆがり 癌の記事みんな僕にもあてはまり あの世まで戦災の愚痴持ってゆき

宇部市 秋 六 花

落選の方から暑中見舞が来 金溜めりゃ凡夫横柄な口をきく

神戸市 丸 Ш 初 前

社用族飲まして飲んで儲ける気 点数を稼ぐ村医のオートバイ

岡山県

楽

善人は軽い皮肉ヘピンと来ず

友情はハガキ一本だけで足り

水晶ののれんかき分け氷店

岡山県 池 田 古 L

くたびれた命なれども捨て兼ねて

病気して寝たと思えと今日も釣り

東京都 居 高

腐れ縁とかの夫婦の子沢山 オルゴールの様におんなじ曲を弾き 得てしてと若さ批判の的になり

雪国のいろり 民話を育て上げ

生みの母探し当てたが二度と来ず

警察の調書 不倫にされて載る

ブザーしきりにお隣りへお中元

植木鉢憩うてみたい苔が蒸し

みおつくしまだこれからのギター弾く

大阪市 西 田 柳 宏 子

舞扇もてば師匠の顔になり

社長長男外遊より帰るを大阪駅に迎えて

父として社長静かに礼を云い

市 辻 圭

水

自粛した祭何だかたよりなく

子の日記親の帰りをすっぱぬき

飲むだけの祭に雨がしてしまい

加賀市 中 恒 雄

狂うても食い気色気は持ち合わし 精神病棟満員暑さまだ続き

志

甲子園赤い郵便車も急ぎ

看護婦の和服になって齢が知れ

西宮市

浜

牧

人

倦怠期返事ぐらいはして欲しい 鱧の皮も一皿にして夏祭り

西宮市 菱

田

満

秋

早 生

助手台にすべて捧げた顔で乗り 大阪府 Ш 清

> 捨てといてあげると層屋持っていき 時計台の下へどちらも遅刻する

二千万かかったそうなパチンコ屋

兵庫県

前

Ш

左

文字

大阪市 部 若 菜

鬼灯の誰に思いを染むならん

もう人の奥さん好みが変って来 大阪市 橘 高

薫

風

子

火に熔けぬものなし五島慶太の計

療養所向日葵廻るのが遅し 草いきれ万葉の世の相聞歌

奈良市 宮 笛 4:

恋夢中まだ喫殻の煙消えず

陽焼けした体で夏を苦にしてず

大阪市 桝 本 路

児

婦人科医他人に話せぬ事も問

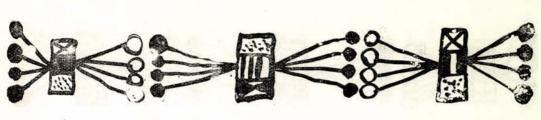
大阪市

111

晃

特手術の為入院

痛みややとれて費用を気にしだし 痛いかとお医者もむごい事を聞く



無理をすな留守は頼むと妻へ書く

釜ヶ崎風景

人間の芥が浮いてる釜ヶ崎

手花火を見てたら童謡が口にもれ ホームシックバーでお茶漬ほしゅうなり 鳥取県 田 中 蛙 眠 子

名古屋市 野 田 念

月を背にああ情熱の捕虜となり 手ぶらなら宅は生憎不在です

神戸市 仲 どんたく

子の様な大学卒に口で負け

男の世界説いて出させる交際費 散歩でもするよう黄泉の旅へたち 恋なれや共同便所のそばで待ち

平田市 久家 代 仕 男

颱風が逃げて農夫は酒を汲む 風流な住まいですねは屋根の草 お師匠の自慢茶室の自在鍵

大阪市 本 3 柳

志

標題で買うた中身へ眠くなり

爼のリズムを乱す子が戻り 見学ヘコツは明かさぬPR 原

秋茄子の味がどうのと朝に昼

出雲市

独

fili

ビール腹その役得を羨やまれ

指名した女が休んでいた意外

姉に贈ったブローチ妹がつけて居り

岡山市 江 K

MA

谷

卒業があと二ヶ月へ髪がのび 宗門を出ても流行歌をうたい

岡山市 光 好 陽

子

サックドレス作ると云えば娘が笑い

西宮市 す s む

相

夏やせを誰も云うてはくれぬなり 妻とする夕餉へ山から子の便り

女の児ばかりと遊ぶあかんたれ

西宮市 野 呂 鵜

71

子が寝れば父が続きを読むマンガ

骨と皮ばかりに情婦してしまい

西宮市 樋 舟 遊

見学のホップの糟も覗かせる ビール工場見学

エチオッピャのシャンぐらいにしか見えず

大阪市

出直して来た傘へ青い空が見え 寝静まってから商人の夕涼み

弁当がおどろかされた鹿の糞 大阪市

大阪市 大 谷 月 都

十代は紫煙残してさっと逃げ 大掃除ガラス四五枚割っただけ

キロの鯛リットルの酒あほくさし

大阪市 石

倉

旅

風

灯を消せばやはりうちわの風がよし 要領を覚えて街に住む雀

大阪市 魚 住

満

湖

松並木主従と知れる人が行く

殺されてもよいとは戦後の女なり もう長ごうないので一辺尋ねとき 入墨の背を夕立たたくなり

通天閣まだ飛下りもされず立ち

市 田 中 狂 -

真似事と云って果した小さい義理 トランジスター奥の院まで漫歩する

その中の一人はまかれるとも知らず 大阪府 林 昌 男

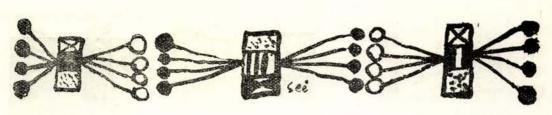
OKをする気のコンパクトを開き この秋の大安を待つ割烹着

愛媛県 村 Ŀ 旭 畜

田のドロが足で乾いている昼寝 先生が酔うてねている村の盆

倉吉市 大 前 鳴 光 月給をみな残す気の未亡人 豊作の予想を百姓まだたてず

蘭



子供まではげた浴衣を着てくれる ながし目をつかう仲居で気が疲れ

鳥取市 北 村

歩

下からの意見聞いとくだけにする 停電のように一日だまっとり まだ夢を捨てずくじ売る前に佇ち

お手前の仕草でコップの水を飲み ハイティーン老けて見られて得意がり

神戸市

傍

島

静

馬

笠岡市 Ш 遠

時時は反対せぬとなめるなり 古い頭だから信用だけはあり あぐらかいて飲むには狢口が小さすぎる 農薬を買う片言の外語なり 不作法なところが可愛い女の子

大阪市 村 Ш 光 輪

大阪府

谷

沢

好

祐

末の子も金魚すくたを自慢する

大阪市 平沢 保 美

蝶タイの下ステテコのトリスバー 起さんで欲しいと宿を慌てさせ 大工さんがとっても好きな男の子

姫路市 植村客 遊

子

すし屋でも女がリードする夫婦

籔入りが冷たい井戸の水を褒め 風鈴が鳴れば負けずにギースチョ 2

岡山市 宗 高 矢 4. 志

> 退職吏馬糞拾うて菜を作り 女秘書ツンとして来て邪推され

日が落ちているのにサングラスかけたまま しぶしぶに行った夏山にとりつかれ 大阪市 大阪市 1 河 島 井 庸 3 す 佑

3

波の間に泳ぐくらげのごと生きん 大掃除わが体力を知る疲れ 石川県同 村 虹

要

月光仮面泣き泣き外科へ背負われる 小鳥にも行って来るよと旅に出る 医者呼びに行く道遮断機が下りる 洗濯機あまい亭主だなと思い 九官鳥にあんたあんたを覚えられ 無競争当選笑いが止まらない

育てるのは義務やないかと子に言われ アレコレと着せる楽しみ女の子 女房のショートパンツにある若さ

松川へ平次親分呼びたいな

泉大津市

高

徹

也

花名刺おんなじ妓から二度貰い 目の出ない同士政治のことに触れ 出て行けに慣れておかずを買いに出る 殺っといて調査に協力するという 愛媛県 槇 (木物改め) 津 光

> 同 沂 詠

警官の若さ直線式理解 スクラムへ午蒡ぬきなど子の遊戯

松山市

前

田

伍

健

文化財金に見積り寂しがり

月賦なら買える生活を見くびられ 須坂市 高 峰 柳

児

学歴職歴申分なく落ぶれる 口髭の風采弱音も持合わせ

方便に血圧と言い席を立ち 今治市 野

宣伝も兼ねて煙突大きくし 金儲け急ぎ詐欺師の思う壺 来賓の気転ところの人をほめ

和歌山市 月 宏 方

僕の家母がしめてる坐が広い

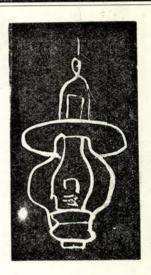
仲人に経済力も見すかされ 今治市 月 原

明

子に飼育されて平和な日を送り

陽まわりは残暑鶏頭秋にする 独身の寝たままでする髭そり器 鶏の生まねば一方的処断 宵

あばら骨見えているのが課長さん



今世

Ш 路 閑 古

阪井久良伎の門に入って、川柳の手ほどき 私は関東震災当時、今から三十数年前、

りも早くから入門していた。正岡容、富士 東魚、前田雀郎というような人々は、私よ 子を持っていた。今井卯木、篠原春雨、 ころだが、それには多少事情もある。 られていないのは、まことに不才の致すと ういう諸名家に比べて、私の名は一向に知 で、少し遅れて吉田機司氏が入門した。こ 野鞍馬、河柳雨吉などの諸氏は私と同時代 久良伎は当時の川柳の巨匠で、多くの弟

ものから勉強してかからねばならぬと思っ 詩として組み立てるには、改めて詩という いなくてはならず、又これを十七文字の知 ある。川柳を作るには、世態人情に通じて 六カしいものだということが、判ったので ってしまった。川柳というものはなかなか っている間に、川柳の大きなカベにぶつか 私は久良伎門に出入りして、川柳をいじ

そこで作品の方は一時中止して、他のこ

なるだろう。

潜っている訳だから、その間聞き噛ったこ

とや、自分の失敗談を述べても話の種には

のことを噪舌るのも、おこがましい次第だ

が、三十余年もこの道で働き、鳥居の数も

世の中せっせと勉強して置くことである。

このような修業中の者が、いっぱし川柳

諸君も恐らく同感であろう。お互いに今の

柳研究者としてレッテルが貼られ、その方 たようなもので、最も力を入れたのが、古 とをやり出した。国文、漢文、漢詩といっ 出したのであり、読者諸君と同じように川 もと川柳を作ることが目的で古川柳をやり 面に事があると狩り出される。しかしもと 川柳と俳句、俳諧であった。今日では古川 まい人が沢山いるから、作家として出ても、 路郎、岸本木府、川上三太郎など、句のう ているのである。しかし今のところ、麻牛 柳作家として、将来なすところあらんとし 人たちを見送ってしまってから、徐ろに打 なかなかうだつの揚ることではない。この って出ようと、虎視タンタンとしている。

> をしている限り、右の事実を否定すること から、川柳という名称を用いて、文学活動 者である、柄井川柳に由来するものである ている。川柳という名称は、古川柳の創始 良伎から聞かされたことである。 は出来ない。これは私が最初入門の時、 今日の川柳は、すべて古川柳から出発し

先生の主張であったようである。 しい句を作って貰いたいというのが、この ので、敢てそれに拘わる必要もないけれど 詩の種目の名称などは、符牒みたいなも 川柳という名称を用いた時は、川柳ら

用するまでに育て上げたのは、私の力ば 呼んでいた。それを川柳で世間一般に通 私が発明したものではなく、以前からあ おうと合うまいと、あなたの御自由であ を作られる場合、それは川柳の規格に合 る。しかし以前は、世間では専ら狂句と りたい。その訳は、川柳という名称は、 を、川柳と呼ぶことは、徳義上御容赦あ る。しかし川柳の規格に合わないもの 「もしあなたが、十七文字で同じ人情詩

> を以て一生の事業としており、又その為 かりではないけれども、私としてはこれ には財産もあら方蕩尽してしまった。

れては困るのである。 の名称を、川柳でないものに矢鱈に使わ かくまでギセイを払って確立した川柳

縛されるから、いやだといわれるならば、 内でやって頂きたい。それでは自由を東 に新風を吹き入れるものであるから、吾 をお作りになることは、沈滞した川柳界 吾々もその詩風に同化する方が有利であ るこそあれ、決して妨害するものではな 他の名称でやって頂く。どんな名称を用 々は双手をあげて歓迎する。但し川柳と るであろう。大いにおやり下さい」 名称を捨てて、あなたの傘下に馳せ参ず ると考えられた時には、私も川柳という 詩で成功せられ、世間がその詩風に靡き、 い。もしあなたが新しい十七文字の人情 いようとあなたの自由で、吾々は援助す いう名称で仕事をされる限り、川柳の枠 あなたのような新進気鋭の方が、川柳

という訳である。 守り立てて来たものである。他人が縄張り 乃公と幷上剣花坊と二人で、喧嘩しいしい せず嚙みつくぞという意味である。川柳は 柳という名称で、他の詩を作ったら、容赦 を荒せば、剣花坊と共同しても噛みつくぞ など、ことをわけての説明があった。川

そこで、私は、

いや、そのような大それた了見は持っ

といった。私はその時二十三才の若さで とで、唯吾々のような若い者の気持を託 だから少しやって見ようと思うだけのこ した作品を作りたいと思うのみだ」 ていない。川柳というものは、面白そう

と久良伎はいった。私は即席ですがと、 代の変化もあることだが、現在のあなた 見しましょう はどんな句をお作りか。作品があれば拝 れ。私にも若い頃があった。それには時 託すことは養成だ。大いにあばれてく 「それは結構だ。若い者の気持を川柳に

し述べた。

私は縷々として、自作に対する所信を申

断って、次のような句を示した。 バナナ バナナ 今日はもう売リ

て、勘定して、 というのであった。久良伎は指を折っ

切れだよ

この句は。夜店の商人みたいだが」 年輩の方は御存じと思うが、その頃は台 「なる程、十七文字である。何ですか、

いたのだった。 ナナを、往来の夜店で、手を叩いて売って た。それが皆せり売りで、腐ったようなが 直後には、街頭にもパナナ屋が氾濫してい 湾から沢山バナナが来ていた時代で、震災

というのであった。

ジャズというものです。バナナ バナナ いう歌詞です。アメリカでは、婦人が閉 が、実はこれはアメリカで流行している 「お察しの通り、夜店のバナナ屋です ハプ・ノー バナナ ツーデーと

> 潔極まるバナナと対照して考えると、こ の句は深刻な社会諷刺になる。」 実と、あの往来で叩き売りしている、不 れるようになったのですが、そうした事 て、この頃では日本でもバナナはよく売 です。この歌は大橋房子が輸入して来 屋はいつもバナナは売り切れだというの 房で清潔なバナナを使用することが流行 して、相等量のバナナが消費され、果物

ば、こんな風になる」 めたくない。もし私があなたのように、 新しい感覚をあらわす川柳を作るとすれ そひとりよがりの、下品な句など私は認 る句がよいが、そんな出鱈目な、それこ ともないが、そんなバナナを私たちの畑 に持ち込まれては困る。川柳も含みのあ 「そういう説明を聞けば、ワカラないこ

といって、久良伎が示した句は 掌中の珠にナイフを添へて出し 久良伎

的ではないかも知れぬが、少くとも上品 である。この句は貴作のバナナ程に国際 松王の気持に通ずるものがあるというの を当てなければならぬ。まさに寺子屋の 賞玩する段になれば、むざむざとナイフ 段が高い。まるで宝玉みたいなものだが んだものだ。メロンは果物として最も値 「これは近頃舶来のマスク・メロンをよ

甚だ通じるものがあったようである。

こうした頑強さが、川柳を守る久良伎と

のではないか。川柳とはこういったよう な調子のものである。何と御賞玩頂けた である。日本の詩としてこんなのがいい

私は頭を掻いて、 「あなたがこんなにうまいと思わなかっ

恐れ入ったというものだ」 といった。 御挨拶だな。そんな褒め方があるか。

親しんだのだった。 伎にして、この程度では、川柳は師につい っきり私は句作を断念して、専ら古川柳に て得るところはないものだと思って、それ と久良伎は甚だ満悦そうであった。

ける高浜虚子と全く同様である。虚子はい 話で、大体判ると思うが、これは俳句に於 久良伎の川柳に対する態度は、右様の挽

以てしても容易に壊れるものではない」 ではない。諸君がぶち毀さうとするハン としてもそれはなかなかぶち毀れるもの 伝統詩である俳句は、いくら諸君の力を マーは却って諸君に反撥して来る。我が る権利がある。諸君が勝手にぶち毀さう あり、それだけの価値があり、又存立す れだけの歴史があり、それだけの特色が (俳句への道) 一諸君が古いと感ずるものには、古いそ

赤目48滝奈良公園 伊 勢 志 摩 湯の山温泉 赤目 Щ Щ 野

アペノ(77)7020 淀屋橋(23)8861

うような人たちとも懇意にした。その他軒 子省二、森東魚なども親友であった。 れた大きな存在は宮武外骨であった。続い て額原退蔵、水木真弓、花岡百樹などとい 古川柳に入ってから、先ず目の前に現わ

岡田三面子、西原柳雨、飯島花月、

梅本

こと、非詩川柳といわれる時事吟も、又詩 究の主力を専ら「万句合」に集中している。 ら始まって「柳多留」「末摘花」と進み、 る人もないのである。 川柳といわれる分裂症的難解句も、それら ついに「川柳評万句合」に至った。 現在行われている正統派の川柳は勿論の 私の古川柳の研究は、「柳多留拾遺」か

といってよい。今から二百年前という、す りは、その源は全部「万句合」の中にある

でに古い時代の頃に、十七字の人情詩とし

すべて十七文字の人情詩を目ざしている限

れらはすべて故人となって、今は数を受け したことも、会ったこともなかったが、こ 塵山などの諸氏は、時代も違うので、文通

> うことは、私の驚きであった。 のは、そんなに飛躍するものではないとい の結果であるが、人間の思いつきというも 一時皆出尽しているとすれば、これも当然 十七字の人情詩として、考えられる手は

の士の清鑑に供えたいとも思っている。 何か適当の機会があれば、吾々の研究して 要求せられたので、遺族の意志を尊重し に至って、博士の遺族からその引き渡しを 貴重品であることが認められている。最近 岡田本万旬合なるものは、現在私たちの研 いるものを、そっくり発表して、同好同学 に納めたことは、既報の通りである。 散逸を恐れて、全部をマイクロ・フィ て、返納することにした。尚その返納後の 究の唯一の資料で、学界にも掛け替えのない 今は一々それを論じている暇はないが、 岡田三面子博士の蒐集された、いわゆる

明な理性が遺族の頭を支配していたからで う。今までそれが問題とならなかったの ら見れば、博士その人とも思われるであろ 品であり、それを見馴れていた遺族の目か のである。いかにも博士の苦心された蒐集 置きたいという、追慕の気持から出ている て、 唯一途に博士の遺品を取り戻したくなり、 ある。それがだんだん年と共に衰退して、 は、これが学界を益するものだという、腎 すでに聞き分けもないという、まことに愍 岡田家の遺族の気持は、これを売却し 唯故博士の遺物を一品でも多く手許に 生活費に当てるというようなことでな

れているのであるが、果して残されたもの

この両者はどちらも「万句合」の中に根源 のは、その駄句と称せられる中にあって、 留」式の句のことであり、革新川柳という ない。つまり伝統川柳というのは、「柳冬 が駄句であるかどうか、俄かに断定は出来 感があって、この中から正統派の句として

「柳多留」が抜かれ、他は駄句として残さ

て、考えられる、あらゆる手は皆出尽した

到 察すべき、気の毒な状況に立ち ったのであった。

時と同じ恰好にして、代表の某 けれども、かつて二十年前故木 に差し戻したのであった。 君が自らこれを背負って、 木真弓氏が岡田邸から搬出した この際いろいろの説もあった

らかにして置きたいと思う。川柳にとって、 着が起り得るであろうから、 会った人々が、岡田博士初め全部死亡して 明 かくも大事な宝物が、永い間その帰趨 の際私の知れる限り、真相を明 しまったことが、事の縺れであった。この たのに違いないけれども、その授受に立ち されたのであるが、保管する人があって、 間に現物は戦災に襲われ、戦後の散逸に曝 一確でなかった。或る約束の下に授受され このような問題は将来にも悶

を、十年以上も守り続けながら、今更散挽 あるかが、問題になった。一本不二の原本 は、これを一体どうするのが正しい処置で 銭で解決の出来る問題ではないから、 領のそしりを免かれない。しかもこれは金 財物を保管することは、現世に於いては構 るであろう。さりとて遺族の意志に反して 忠実であるとて、恐らく後世の非難を受け の危険に曝すということは、学に対して不 ら金を工面しても遺族を納得させることは さてこのようにして、活き残った現物

内装三段変速

SHIMANO &

野工業株式会社

出来ないのである。

練った。最初こういう事態をもたらしたの れたが、右に述べたような事情で、そうで 迷った。岡田家とも往復して、 リストでさえ、それは学問の神に捧げよと 像ではないが、蔵書印である。イエス・ク ということになったのである。「万句合」 ものはカイゼルに、神のものは神に返せ」 ルカ伝十九章にあるように、「カイゼルの ない事も判った。それで結局は新約聖書の は、岡田家を嗾かす商人の策略かとも疑わ を与えるものと思って、愛読している。 通りにしたのである。私はクリスチャンで の遺族とも思われぬむずかり方を、私たち て、手許に置きたいという、英明な三面子 はいわれなかった。是が非でも、記念物とし の現物に打たれた刻印は、三面子博士の肖 はないけれども、 は許容したのではない。唯イエスの言葉の 返すも不可、返さぬも不可で、私たちは 聖書は川柳にも日常の糧

十数年間よくこれを守り通した。



東

訣

な話をした。 ときこのキレイなおばさまはこん られた形になった。おかげで、木 暮さんとも面識ができたが、ある 文句はのみ友達の私が引受けさせ 長がすし屋さんなので、機関誌の がある。会長がそばやさんで副会 ぎふに木暮実千代さんの後接会

けることはないですよって。これ 千円という高い化粧料を買ってつ け、五分間で冷水で洗い落す、こ をコールドクリーム代りに額につ 間暗いところへ置いておく。それ りつぶして入れよくまぜて四十日 とねーその方法とはですね、蜂蜜 でもつぎの方法にはかないません 専属になってますけど、その技師 んな科学製品のスイを集めたもの です。四十過ぎの女性の化粧はど 長という方がこうおっしゃったん 一合にニンニクの一房の一つをす 「私ね、ある化粧料メーカーの 一番効果がある。何も一瓶何 ッパ鳴りの音はしたが相手はつっ 打になるほど味がある。パチンと ていない。

爾来、牛乳瓶に蜂蜜を詰めること 木暮さんと同い歳のうちの女房が 合成一級酒を作るようなものであ る。秘訣は一面経済的でもある。 る。つまり灘の生一本を分析して を覚えたが、効果の程はまだきい スを無駄なく集約したものに思え ユーにもちます」 なら製作費二十円、まる一カ月は 考えてみれば新薬も漢法のエキ

間

らなかったことである。 のあるものとはそれまでついぞ知 ない空面のしじまがこれほど価値 と水に届いた音がした。手応えの 二歩歩き出したところで、ジャー をやった。しこたま排せつして ところから小便がしたくなる。若 い頃、随分大きな橋の上からこれ チャンバラや西部劇でも、一騎 酔っぱらうときまって私は高い

に、おばあさん二人とじいさん 私の住んでいる町のさるパン屋

しも小便も、間合は正に芸術であ きそうである。色恋も借金も人殺 合のとり方一つで駈落ちにまで行 柳の一句だが、首尾はその後の間 拍子に後家もおち」急な様な古川 のも、昔の人はその間のとり方に なる。小便と殺しのおかしな例で え、二丁拳銃の冴えということに 立っている、オヤ?と思った頃合 ソッがない。「かみなりが落ちた 合のとり方がうまいほど剣豪にみ で人間の価値判断が異るよう 恐縮だが、人間はこの間の持ち方 ころ、相手の無法者がドサリと前 銃がスルリと帯革にすべりこんだ る。西部劇も同様、煙を吐いた拳 た。人間という字にさえ間がある この「間」にあるようだ。この間 へつんのめる。殺しの迫力は実に にバッタリその男が棒倒しにな

左様に三人の間柄は世間が知りす れをきいた私が小パカにされたの んがおしゃべりで、『途方もな ぎられて当り前になっている様 ではやりきれない。しかし、殊は た。三人の方なら話は判るが、そ の額を眺めてあきれた様な額をし な』といって何を今頃とばかり私 かと考えていたら、隣りのおばさ の三人が住んでいる。ひどく仲が いいので女の方は腹ちがいの姉妹 い、あれは本妻さんと二号さんぞ

だってお前さん十何人も奥さんが がね、そういって私を慰めてくれ かりのあけくれでした。明治天皇 もんだから私は好きな碁、将棋ば です。二人ともやり手でしっかり のなら三人で暮そうよ、ってわけ そのときいってやりましたよ、面 えらいモメましたがね、わっしは たもんです」 いたっていうんですよ、あの二人 ツ話の末、私たちどっちでもええ 倒くせえジャンケンにしろ、って って奴は独占欲が強いから当初は いんですな。一晩中二人でヒソヒ ね。それが案外両方に効いたらし もエエとこもない。そりゃね、女 をのんでいるそのじいさんに会っ も人並で、どこという悪いところ いった。じいさんいわく「どっち たので、つい話がそんなところへ ところで過日、さる食堂で焼酎

という話であった。 要するに人間は分別がかんじん

きのパン屋の親爺が、極道回顧録 を二ハイ目の焼酎からはじめた 東映の進藤英太郎そっくりの、さ をつり」という孝輔の句がある。 が、彼の情事は蚊帖にあった。 「親のうちがいいもんだから、 「落ちぶれて部屋に余った蚊帖

て寝たときの暑くるしい上の味気 ね、この気持一」 中では寝ないんですよ。 は以来、白敷帖だけは今だに手離 できたところがありまして下の方 だらけ。ところが女って奴は妙に なさったら、おまけにそれがコブ て裏ダナで八畳の蚊帖を半分にし なっちゃって…。しかし食いつめ 中にいると妙にこの女が頼母しく うな白麻からすけてみえたんだ 呂上りの赤い二の腕がカスンだよ しませんな、それをまた上の方 が、ゴワゴワしてる四角な蚊帖の てね、そんなかで口説いたんだ みたいな青蚊帖、これが好きでし え、本妻の方、これは安ものの板 から若いこちらには眼の毒。え に寝ていた。紅い箱まくらで、 物屋の後家で、白い麻の蚊帖の中 が薄もの越しの女。うちにいる下 さんざ芸妓遊び、女遊びをしまし たがね、一番そんなときに弱いの (本妻)が承知して金輪ざいその の方(二号ばあさんの事)は、荒

等以上の心意気になるという好 人間も気心が徹底すると、

三身



古句の珠玉を私は古典句という

伊 志 田 郎

を頼まれた時、私は路郎さんの 先日、句会で枕という課題の選 子沢山僕の枕はどこへい

の夥しいこと、従って各誌に満載 ら私の手元に寄せられる柳誌の数 に接しる、住吟の数々、なつかし 見しては忘れ得ぬ柳友諸氏の雅号 間に生れ出る川柳というものは大 されている作句数を思えば一カ月 を直ぐに思った。毎月東西各地か の時代の私が殊更に記憶力旺盛だ か、遠い昔から覚えている句はそ になった。これは私の年齢のせい きざみ込まれて了う句が近頃は稀 に生涯消し難い一句として脳裡に へんな数量であろう。いちいち拝 難いことである。 ろうか。どうもその何れとも断じ の作品が余りにも数多いためであ ったゆえか、それ共現今では、そ 打たれて当分その句を愛誦し遂い いことである。けれ共、ぐんと胸を

枕の句では私の身にしみている 雪折れも千鳥も枕しての

> 知れぬが私はそうは思わない。何 とって古典句である。そんな昔の 古典句と言う。雪折れの句は私に として範と仰ぐもの、それを私は う。その中で、特に珠玉に価する 江戸時代に出来た句の総称である がある。明治は言わず、古句とは 故なら、都市でこそ聴けないが雪 句、古くさい。人はそう言うかも 層、静寂の気を募らせる。そんな れる音、その雪折れが反って えかねたピシリッ、という竹の折 の静寂を破って、雪の重さに耐 しんと降り積もる真夜中の雪、そ か。そんなことはあるまい。しん っては雪折れなどは聞こえない である。あわただしい生活裡に在 今日だって雪折れの音は冬の実感 深い地方なら竹藪のあるところ、

である。けだし、寝そびれた夜さ とするところ古物に一つもないの に並べてみると、この一句の素材 は人間生涯の必需品である。斯様 発見、そこには常に新鮮で時代を 思う。風流などというものではな 迫力を持つ。私はしみじみとそう に仕立てながら実は心憎いまでの いぬ言い廻しで然かも一見説明態 合、枕してのもの、と接続詞を用 が詠みあげたもの、そしてこの場 むの感懐を繊細な感覚の川柳詩人 も沢山飛んで居よう。枕に至って ものではない。 超越した川柳が生れる。が、それ の区別無く、繊細な注意力に因る 感を詠んだ一句である。都会地方 い。現代でも充分範とすべき孤独 は、そう安易にぞろぞろと出来る

女の気 逢うた日を覚えて居るが

は思う。私の母などもたいした 句だから古くさいとは言えぬ女件 としても 矢張り、チョン髷時代の がらりと趣向の違う句だが、これ 心裡をよくぞ詠破した名吟だと私

寒い、と唄われるからは、千鳥と

て風流の昔にのみ棲息していた鳥

く夜さは、ガラス戸締めてもまだ

類でもない。淡路へ渡れば今日で

いであろうか。ちんちん千鳥の鳴 事象を採りあげるのは思想的に古

> 日への慕情の優しさは美事詠み得 ろの、逢うた まして女ごこ つ、こんな句がある。 て古今の人の感動をよぶ。もう一

> > 浮かべたり、思ってもいない、こ

っと子供の頃の友達の笑顔を思い

れは又別の街角の光景を脳裡に写

出したりする。それが今、腕時

気違いも借したものをば取り

と何等関りも無い飛んでもない物 る。そして時に、今考えている事

事を、ふいと思い出すものであ

る。例えば、腕時計のネジを今巻

いて時間を見ている。そして、ふ

う。むしろこの句はその典型的な 川柳は人間くさいものであるとい とか思い出しては、借したものを 名吟であろう。利巧なズルイ人間 十七字の中に盛り込まれたこの暗 る。気違いになっても時折り何ご その弱い人間が犯す罪がもとで凡 奴こそ弱い人間なのだが結局は、 共は凡人を欺し、乗り越えて生き として尽きせぬ人生観を思わせる ば取りたがり、なのである。僅か 人の方は物狂いと成った悲劇であ てゆこうとする。実はそのズルイ 涙、実に川柳味の滑稽とは、切々

> その後の交際もない人なのだから 聯性など無く、幼な友達だとて 計を見ていたという事実と何等関

あるであろう。

灰皿の醜さ二人まだ起き

あるが誰れしもこれに似た経験は おかしい。瞬間消え去る想念では

りして居ても仲々に、全然何も考 えないでは居られない動物であ 人間は不思議なもので、ぼんや

た。この人の句に

事だったと宛 を、あれは何 に空で覚えて けて居たよう ら日記でもつ 年何月何日の ない日の記憶 出来事でも ものである。 いては話した

17年の出

(94)

である。今日柳界にその名を見な 大正時代の柳人、吉之介さんの句 た柳友に栗坊さんというのが居 したこともない。既に放人になっ い。そして何十年か、私はお会い

よって作句する意慾が湧かなかっ ない、というのはその日の課題に ばまた悲観したり恥しがることも 決して恥かしいことでもなけれ

席してほしいと思う。

うとこの句と同席して居る様な気 の柳友の生前には、栗坊さんに会 彷彿として浮かんで来る。いや、こ 毎に昔の友のニソッとした笑顔が 品であって、この句を思い出す うきんな人格が表現されている作 何にも栗坊さんという人の、ひょ クションの句であろう。けれど加 歩くこともなかろうから正にフィ として、御当人が提灯など持って というのがある。都会生活の日常 提灯が膝にぶつかる大急ぎ

> 力であり生命というものであろ れるものである。それが川柳詩の 然とした一人格の存在が感じとら 無の一句からは個性色の濃い、判 ざまな人物が躍り出すし、人物皆 の連想から、主格を取り巻くさま の中の登場人物は唯の一人でもそ がしてならなかったものである。 およそ名句とも成れば十七文字

夜長酒亡き玉菊や小夜衣や 孝三郎

句会のことなど ― 全没は一人ではない 白

よく聞くことだが句会で全没に

る、そしてその着想がどう違って 自分の句とくらべて見ることであ りその時の入選句の披講をきいて なければいけない、それには矢帳 てその欠点に気付くように修練し そこでもう一度句を読みかえて見 か欠点を持っているものである、 けれ共没になった句は矢張りど いうわけには行かないと言える。 出句した句が悪るかったからだと こともあると思うから、あながち かない)などによって没になる があることは認めないわけにはゆ 柄ではないが多少はこうした傾向 好き嫌い(これはあまりほめた事 たりすることもあらうし、選者の

くあることは止むを得ないことで 場であるから全没になる人も数多 制限された時間内に作句して競う 柳人たちが集まって、同じ課題で もなく作句道場であるから多くの はないかと思う、句会はいうまで ものを考え違いして居られるので れは句会の持っている使命という かないと言われる人があるが、こ なると体裁が悪いので句会には行

ある、併し一句も入選しなくても

義があるわけだといえる。 てこそ句会が道場であることの音 とはないと思う、そうして勉強し あればだれが没になったか判らな 来る、というのが句会の有難味で いわけだから決して恥かしがるこ るわけであろう、多人数の句会で ある、そうした気持で句会に出席 あったなどについて知ることが出 いたか、表現の上にどれだけ差が すれば、良い勉強になったと喜

かしがらないでどしどし句会に出 それ位いの心臓を持って全没を恥 に思って、シャシャしたものだ、 らないから没にしたのだなぐらい りそうである、私などはよく全恐 になることがあると、俺の句が判 があり、川柳に憑かれる原因があ そこに、創作としてのたのしみ 天位に入選したりする事がある。 でも素晴らしい着想の句を吐いて は限らない、始めたばかりの柳人 多くなるものである、句会では先 輩といってもいつも名句を吐くと になじんでくれば入選することも る、そしてだんだん句会の雰囲気 機会がもてるということにもな また自分の意見も聞いてもらえる とについても尋ねることも出来、 る、知り合が出来れば没の句のこ 出来るというのも句会の功徳であ 輩や友人に色々な話を聞くことが もう一つは句会に出席すると先

> のである。 る側にとって一寸困ることがある ないというのでなくて、句評をす 課題吟には句評に採り上げる句が 作者の個性がはっきりとあらわれ なるのは仕方のないことである、 から句評の句を採り上げるように ひく句が多いからどうしても雑吟 にされていて、読むものの関心を 生活態度といったものが浮き彫り ているし全体的には多くの作者の うので自然こうしたことになるの たものの集積だからそこにはその のあい間合間に、折にふれ詠まれ 態度も違い、また選のあり方も違 ということは、雑吟と課題の句作 と近作柳樽だが)は作者が実生活 であろう、雑吟(本誌では川柳塔 句評は雑吟からというのが常識

るものであって、必ず選者がその

されるものは うに天地人、 によって発表 佳句等の順位 殊に本誌のよ 許とも言える まり一種の句 わけである、 れるもの、つ 示していてく 作品の優劣を す通り一つの題によって競作され 課題吟というものはその名が示

統一選と違っ

スタジオ

目南50米西側 ユニオン洋装店階上TEL(25)4943 ろうか。 があるのだと言ったら叱られるだ 広い範囲の句だから、何にもこだ わらないで採り上げられる気安さ かも知れないが一つ題によらない 選者があるではないかと言われる とを申上げて置きたい、雑吟にも らべてレベルが低いとか、準川柳 だなどと思っているのではないこ 評に採り上げることが少なくなる のであろうと思う決して雑吟にく ては第三者として一寸困るので何 ないけれど)に関するようになっ 採り上げた場合に、選者のけんいの句(非常にいやな言葉だが)から その選者とは違った観点から下位 り上げるとはきまっていないし、 をする場合、あながち上位のを採 とが出来る、それで第三者が句評 によって表わされているというこ て選者の意志がはっきり句評の形 (そんなものがあるかどうか知れ



高 鈍

のまま亡くなった。 沢山こしらえて今も生き残ってい ある。一廻り下の二黒の申歳に末 る。僕の下に三つ下の妹がいたが に姉が三人他家に嫁して甥や姪を っ子の僕が生まれた。兄と僕の間 二十才にもなって脳炎に罹り処女 僕の兄は総領で、五黄の申歳で

れるのはその妹である。丸い色白 きたりすると、やっぱり憶い出さ この頃の盆踊の太鼓の囃が聴えて 団子鼻でないにしても鼻先は丸く の鼻は決して高くなく、僕ほどの でポチャポチャっとしていた。そ 憤ることなく、 であるぞよ。 既に三十年ほど前ではあるが、 愛いかった。 一と言われて彼女は ニンマリ笑ってい 一お多福とは美人

をいうのだろうか。そういえば兄い。所謂貴族的な鼻とは兄貴の鼻 らず鼻翼は撮んだように鼻口が細 についてさんざん苦労して商売を らくる感じは、小さい頃から親父 の鼻が象徴する如く、面かたちか の鼻は、高いが大きからず、長か 好は概して申しぶんない。殊に兄 三人の姉は父親に似て鼻高で格

> くなく、理屈が多くて大学の教授 いころの貴公子の風貌は、今もっ していながら、根っから商人らし てイギリス的老紳士と言ってもよ (最近の面影) みたいである。 若

像することが六ケしければ、兄の らく僕の顔から、この兄の顔を想 共通の詩人友達が異口同音に いはない。それは僕ら兄弟を知る く、他人がそういうのだから間違 弟が互いにそう思っているのでな すことは不可能だ。それは僕ら兄 額からも亦不肖の僕の額をダブら ている。 ところで弟たる僕たるや、おそ

お多福美人論をぶってやるのだ。 れほどでもないが、一お母ちゃん 鼻汁が正面に飛沫した。妹のはそ 穴が、はっきり上に向いて、魔 らない。母親は低鼻であった。鼻の 血を継いでいないように思えてな かりでなく、全然といって父親の 於いて母親に似てその血が濃いば っと悔むのであった。そこで僕は の鼻に似てウチいややーと僕にそ (くしゃみ)をすれば神のように 僕と死んだ妹は面貌ちが大体に

> それは決して母や亡妹のように低 鼻ではなく、鼻眼鏡をかけられる 長く鼻翼が大まかで、自分の親指 ほど隆鼻が通っている。 さて僕の鼻を語ることになるが、 ぐらいは平気で通る穴が黒々と開 たいに……。 いている。小山を貫くトンネルム 但し鼻は

親のものでなくオリジナルなもの ことになるのだろうか。 でもないとすれば、僕の鼻系はシ ので覚えているが、別段僕と似て 母は僕の幼少のころ存命していた の祖父母は知らぬが、母方の祖父 しい。深刻な憶い出がある。父方 であると、威張るにしては些か哀 ラノ・ド・ベルジュラックに遡る いたようではなかった。隔世遺伝 このような偉大なる団子鼻は両

髭のように、しごき、ちょ、ち 趣味である。しかもその鼻毛を口 鼻毛をいつものぞかしているのが 僕ほどではないが団子鼻で、長い 生でゴーゴリや、デミアン・ベー 住み親しくしていたロシャ語の先 ょっと引っぱるのが彼の癖であっ ドヌイを翻訳していたN氏の鼻は そういえば、戦前自宅の近くに

> 変っている。終戦後、ずっと逢っ と職人に注意をするそうだから ず、行っても鼻毛はそのままに、 懐しい。僕と同様に呑ん兵エで、 互いに団子鼻を赤くしてへらず口 ていないが、あの団子鼻と鼻毛が だそうである。 相見に言わすと団子鼻はお人好し を叩いたが、邪気もなかった。人 理髪店は年に二三回しか行か

近頃、鼻毛まで白いのが交ってい 尚なる趣味とはいえぬだろう。 て鼻毛を抜き原稿用紙の桝目に林 るのはちと寂しい。思案にあまっ と指に触れ次弟、抜くのである。 すのだけは悪趣味と心得、せっせ で、苦にしないが、鼻毛をのぞか せず、今だに団子鼻はそのまま だけのもつアンヌイであっても高 立さすなど、漱石ではないが男 それ故に僕は整形隆鼻手術は

僕の図子鼻は実に庶民的で俗物的 るだろう。例えば の主人公に出てくるが、そのよう することによって一切が判明され である。兄と僕の相違は鼻が象徴 に兄のような貴族的な鼻に較べて

チ、貴族的、 ホ、几帳面、へ、品行方正、ト、冷悧 、眉目端麗、ニ、嗜好物の高貴、 兄の場合、イ秀才、ロ、白晢痩驅、 僕の場合、イ、鈍才、ロ、精悍肥体

のような人格が、僕のより優秀人 ても背反している。公平にみて兄 という風にどこを押しても突い

うに思う。父親の血筋が士族で直 侍であり、祖先が荒木又右エ門で 簡単にきめられないものがあるよ 物であるとは考えられるが、しか 親交があったと聞く。それらの血 で晩年山に亭を建てて文人墨客と 祖父が讃岐は屋島の最初の開拓者 あったことなど自慢にならぬが、 か、ということになると、 し人間としてどちらが良いか悪 そうは

が兄貴に全部遺伝してしまい、

僕

出したり、一寸した質を効かす親

の親父でありながら、興業に手を

分でもあった、という祖父さんの

れは恐いみたいなものである。 血を僕が引いているとすれば、こ

を篏めていた記憶があり、その鼻

で太い指に下司な金の巾広い指環

その祖父さんは腹のでっかい人

が、母親そっくりの獅子鼻であっ

10

の炭屋の娘であった母親は、炭屋 はといえば、町人の血を引き、祖父

団子鼻は必ずといつてよく漫画

、薄眉厚唇、ニ、ゲテ物安買、ホ、

ふしだら、へ、無頼不行儀、ト熱血、

短い鼻筋を通して、上品である。 方を慕ったであろう。 貧乏士族の厳格な祖父さんより きていたとしても僕は、侍の果て りで、寄りつき難く、子供の頃生 鼻は父親そっくりの、高くて少し ろでは白い長髯を胸まで垂らし、 しかし目元はきびしく父親そっく る、親分の果の好々爺祖父さんの 父方の祖父は、写真でみたとこ

今年の路郎賞をかち得た西川氏の血というものは争えぬもので、 親の はそのへんの血縁を句にしたよ Ú1 が無事な男にし てお

親父が今年の一月八十一才で往まうであった。

生した。男の子が泣くのは親の死んだ時。と聞かされていたが、数年まえ、母親の死んだ時には僕も 泣いたが、今度は泣かなかった。 納棺する直前、白布を除いて最期のおわかれをしたが、その老父の 顔は赤茶けた皮膚も流石に蒼味がでていたけれども、鼻だけが白く格好よい美しい象牙をみるようで 格好よい美しい象牙をみるようであった。

そして僕は、親父が兄貴そっくりの男前であることを初めて発見りの男前であることを初めて発見した。しかも最期にみせた親父のした。しか達の泣き声を忌わしいを離れ、姉達の泣き声を忌わしいものに思い、一人遠くへ離れてしものに思い、一人遠くへ離れてしまった。

僕に何かと頼るようになってきた のに就ては、父と母の夫婦愛に何 かった。自然に親父は兄を母親は ができると、その孫にまで目がた 年から壮年になり、結婚して子供 から、殊に僕を愛してくれた。青 その代り、母親は、妹を亡くして 受けたことがないように思う。 親父の愛情を幼少の頃から素直に ぎるほど当然であったかも知れな 養を尽さなかった。これは当然す である。冷飯の僕は親父からは、 い。ひがみかも知らないが、僕は うとまれ僕も亦兄貴ほど親父に表 兄貴は親父の面倒をよくみたもの 親父は生前、兄貴と気が合い、

まぶとなると、こちいっきが作ら感付きはしていた。 かう位のことは早くかか、割り切れないものがあったのか

母が死ぬまえ、二階から飛び降 りる真似をしたり、手足、口が不 自由のため、よく転んだり、落ち たりして、生キズが絶えることが なく、その看病には兄嫁もほとは なく、その看病には兄嫁もほとは なく、その看病には兄嫁もほとは なく、その看病には兄嫁もほとは と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末であった。頭が変 と手を焼く始末である。その頃だ、 機は一日本家に呼びつけられた。 様は一日本家に呼びつけられた。 たすると狂言を書いて親父や兄貴 をすると狂言を書いて親父や兄貴 をするとであった。

親父は僕の額をみるなり、―おまえは、お母さんを農や兄さんにます、ほったらかして可まかしたます、ほったらかして可まかしたまま、ほったらかして可いと思うのか―と頭から呶鳴りつ

そこまではよい。父は一息入れ

いる。やがて僕は心気をやっと静 せず兄貴は傍にいて沈黙を守って た。父のいうことを遮ろうとも し、身体がわなわな顫えてしまっ この時僕は余りの意外さに激動 が、うんと孝行せないかん。」 ダの介抱は儂らよりもおまえ 間に出来たんじゃ。じゃからサ る立派な男じゃった。サダとの が、山口県人で地位も名誉もあ おまえの父は数年前に死んだ におくつもりで居ったが、サダ が、おまえは儂の子ではない。 から、この際きっぱり言うとく (母の名) があんまり気儘じゃ 「儂はおまえに一生言わぬまま

おのこと黙っていた。おのこと黙っていた。

たものではない。 いのか、父が悪いのかそれは判っ のことを言えば子として、母が悪 たと想像されぬこともない。本当 に、その下宿生と既に内通してい だ。或は母は父もいた広島時代 る。母はその官吏と一緒になっ 頼って、何年か寄寓したそうであ 口県の××に勤務している自宅に た。そして胎んだのが僕だったの た若い官吏が、出世して郷里の山 しい。母子は広島時代に下宿さし で渡り一旗揚げるつもりだったら まえは事業に失敗して朝鮮へ一人 たらかす癖があった。僕の謎れる たようである。父は若いころから 家を外にして、何年も家族をほっ も父の方に憎しみがつのっていっ しかし日が経つに従い、母より

しかし、山本有三の小説「真実

なんであろう。

3

ら受け継いだ、宿命の血でなくて

一路」にある父は、その娘に最期 を怨む所以は、もう少し隠して を怨む所以は、もう少し隠して が必然む所以は、もう少し隠して ないて欲しかったことである。 と作者の は、ことである。との娘は は、ことである。 との妻に が説論する。と作者の は、ことである。

本りて後しかったことを知って間もなく親友の O 君に酒を交しながら打ちあけた。 O 君は酒かで、といながら打ちあけた。 O 君は酒かで、といながら打ちあけた。 O 君は酒かで、と、しかし僕は四十が五十でも、現在実の父があると信じ込んでいる者に、突然親と違うということになれば、その衝撃は、案外幼い頃に知らされるより大きいのじゃばい知なっと言えば、「それは、をかかなっと言えば、「それは、をの衝撃は、案外幼いないかなっと言えば、「それは、をの衝撃は、案外幼いないかなっと言えば、「それは、をの衝撃は、案外幼いは、たの衝撃は、案外幼いは、たの衝撃は、案外幼いは、たの衝撃は、ないかなっと言えば、「それたことを思うと僕は吾にもあらず感傷的になって泣けてくるのである。

だから僕の父が遺骸になったとには泣けなかった。本当の僕の父には泣けなかった。本当の僕の父には父無し児を聞かされた時、既には父無し児を聞かされた時、既には父無し鬼し、団子鼻は、そのころから筋が通ってきた。兄や姉違の話を綜合すると、あの山口県人の話を綜合すると、あの山口県人の話を綜合すると、あの山口県人の話を綜合すると、あの山口県人の話を綜合すると、あの山口県人の話を終合すると、あの山口県人の話を終合すると、あの山口県人の話を終合すると、あの山口県人の話を終合すると、あの山口県人の話を終合すると、大田の人が遺骸になったと

ノイローゼをふっとばす

催眠剤ですが、又一方 使用法もその一ツ…… トランキライザー的な 例えば……最近話題の ています。 大へん広い用途を持つ 緩和な鎮静剤としても 今晩はプロバリン錠で あまりクヨクヨせずに とれで気分も落着いて た時にいつも二ー三錠 プロバリンはもちろん 夜も又安眠、という駅 イライラ、ジリジリし 形睡なざつて下さい。 に於ては大脳皮質性の

習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛剤



30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g~

"

北 麻 111 生 路 巣 郎 選 選

> 暑中見舞残暑見舞 女房の経済白

0

事 あ 未

から

書 6

さ

3

る

吻をしてる

邦

间

0

低

V

Ė

」が消

ii

踵

ろ 迈 3 る

L

7

感心して女おんなの り手の没我 0 H. 0 媚 美 を L 見 < る 大 阪 iti 村 梨花

窓みんな閉めて悲しみ解き 演出と思えど又もひ カスと握手エロ スとも 2 to 放 握 か 手 ち n 口

170 部 क्र 上林 同 粗影

天災が忘れぬうちに

来

C

慌

7

5

ri 同 同

父さん卵焼が好きで

<

オヤ野壺を覗く

南 to

瓜

0

花 羽

di 百 百 H 富 永

愛情の

鏡 は

反

す

時雨この家

競 夫

売

0

公 射

中 る 本堂は極楽夏 観光課とタイアッ

の昼寝の善女

た

to

4 +

デラックに舌打ちをき失対夫

プ儲ける寺が増え

μi ii

夢路

薬石の効あり

*

身

不 魔

随

0

居 n

労基法貧しき者の邪

ts

西

B

百 きるう見とれてい間に文字 宿命をなげき女は

冬物の月賦をは 夕刊だけが待

夏

期 共

手 稼

7

3

3 え 與

他人様が世間様がと寡婦老

案内を請えばスリッ

プだけ

0 け

古 る

夏やせを待って見合の写真

٤

n 当

宿題を涼しいうちに 改名料取られただけで運 一稲を植えれば台風 イン用の万年筆 水を見せてだんなを泊まらす気 から 阜 親 V る 15 は 3 来 1 来 気 3 ず 美 称

1/1

hi Fi II

安平次弘道

台風の目の中にいて 恐妻家の卵も来てる 大臣賞お次は 僕 0 番 悪 び ts 九 ブ 1) 村 す 118 松

177

宗太郎

なんかはそれ自体

価値を失っ

た句

解訳に三つも四つも異議が出るの

移民するにもたんまりと金 下手な仲裁だけど 一付で呼ば n 7 怖 頼 U 社 長 n 室 竹

父さんは放っとけという子の育ち

逆立ちをしてでも運ぶ蟻の 速達が来て世話好きはまた

意

地

同 同

同

口

6

n

3

愛鳩

万事スピード時代、

それもよろ

血を売ってまだ人間にある

走 未 示

1) 練

原 ifi 杉原 同

同 同 同 同 関

朝顔よ洗濯好 えんぜんと保険募集が訪 松川事件より 戻り家がよいとは 稲の穂が気に さ 0 世 妻 辞で ^ 12 か 3 咲 ts かっ < る 9 L 脊 瘀 715 同 同 同 藤 甲吉

95 市 伊原 口 同 同

当分は死火山

V

Ľ

波

独 栗

1)

明 林

をとって居る様な味気ないのが多

最近の句はまるで事務屋が事務

は重恵である。良く云えば文化病

読んで

ユーモア欠乏症は川

柳にとって

られない なのかもしれないのだが、 一人笑いする句なんてめったに見

軽味の何を詠める作家が何人ある が、果してその笑いの過程を経て そんな句は古い。 いってしまえばそれまでである

が、「笑いの無い」わかり切った か捨てて貰いたい 言われるような計ちょろい夢なん 作句リレー提出句も結構である 初めから枯れた何を一流作家と

供えられ、それ以後の数日を読破 が到着すると、先ず仏 に精魂を傾けられたと聞く。 その熱意を以てしても、 白味のない何は かつての家沢郷花氏は 頂き兼 前に半日を *ねると洩 い川湖に 川柳雜誌

酒 井 U か

平

飲

楽の前売り

を

す

る

仏

壇

昂 Us 世 3 け

同 同 同 同 Ш 同 同 [ii]

んで寝て飲んで寝て祭り客帰り

æ

37

市

八九九寸

玉にきずとは金のないことらし

業に貴賎はないと茶をく

ま

税務署の賞状

社

長

室

174

8

iti

本

傘

魂は負けるマージャ

世も末と嘆き時代につ

いて ンまで習

H

ず

叱ら

れているのにディトの事思

物の好きな夫婦

C

夜

食 12

す 揭 不器用も忘れてはいる踊

n

0)

人間

は踊 な

物 10 餌

灯 雑

から 草

炒 美

5

< V

\$

V 品る動

好 0

L

い日に鳥

もきれて

<

汗を拭き拭き 夕刊の時間に合わ

水

中

踊

ŋ 興

観

同

世

神

渡

御 3

> 同 室井

仏より妻にすがって生きつ

11

三十で起って四十でよろめ

い

同 同 同

馬鹿になってやっと気持が楽にな

読経する目がお供えの蠅を

追

V

務曳野市

高橋

尚

史

同 同 同

E スター

サビを云うて洋間へなじまで

のように海では憩われず



善人というデボチンが目立ち過ぎ

びほうけ垣根に足袋を干し忘れ

産制をしてる隣とう

ま

が

合

週刊誌また子供からリ 孫去んで新聞ためたのをひ 何 元 これしきのウソに善人気がとがめ 先祖の草抜きをして顔が 一やメダカそんな荷物の孫 - 要性で借金してるように もせぬ社長 少 尉 殿 を 養 番 5 汗 1 妻 か が去に 3 腫 3 0 云 かっ れ げ 10 腕 岡 嘅

> 同 ri 百 司

雷

万女

言い負けてあんたのエトは何ですか おなごはん泣かせきず子へお世辞 ゆうとした服で百円貸せと言う 「館高い昼寝をし 7 か え R 25 iţi 当野 口 пi 同 百 百 哲

恨み骨ずいに達する人が時

紹介状合からすぐに行けと

U 0

5

H

肩

書のあたりを名刺突き

刺

悟

日

曜学校

岸和田市 口 百 同

厚化粧

四十の恋がか が居てお祈り

ず

西

B

市

樋 百

涛

栄

笑う子

を

9

くる筈のない中元が

来 <

る 3 ŋ

気

恋 景 れ 直

L

同 同

内藤 同 きさ子 生きている父を忘れて亡母

大臣 子のために貯めて子のため皆費 木 いたくをしても一人と云うく が小粒に見える 牛 ンの顔だけ男 船 見 ٤ T 步 な n き い 枚 方市 草深 同 同 III

員 塚 क्त 護 梢月 酔舛

結構な御身分ゴ 胃袋が夏の暑さにな 敗けるが勝ちと弱虫 料は安うても冷房 がラジオの中まで来てあ つ作るに政治とひも iv 7 ま 焼 あ 0 Ut H る 頭 かい 出 等 会 ば 0 撫 30 社 to 爱 废 縣 同 司 同 同 同

岸和田市 同 きえ

ろうか。

は欠かせない修業なのではな ないが、面白い味のある句の作 は思う。

永い下積時代は苦しい事に違

何い

飛び越しての飛躍は望めないと私

い、しかし川柳に笑いの研究を

3 1 to

田端くに を

> 日 記

帖

私の家から程遠からぬ処に、

聞をはばかって、 と家の中へ入らないのが習慣であ やら都々逸やら、果てはお富さん を引きずって帰り乍がら、浪花節 でアイスキャンデー売りの自転車 きで、若い頃からその日の儲けを 吉爺さんの家がある。春吉爺さん までを明い尽くしてからではない 飲んでしまうのが爺いさんになっ は今年七○幾つかの筈だが酒が好 からも直らなかった。陽気な酒 ばあさんは世間の外 春吉さんを引き

●美容衛生剤G11●アラントイン●水溶性ラノリン 配合 アストリンゼン

太陽に逆らうつもりサング

ラ

ス

熊

本市

麦彦

77

子を叱るような寝顔と受けとれ

す

握手する型に変って

還

2 わ

7

来 す 3

兵庫県

遠山

可住

自尊心一円な

2

かっ

抬 かっ

3

同 口

豊年をお役人から聞

3

れ

鈴木村諷子

山の寺 刺激欲しいかおがならんだ海水着 酒のしみつけて女給の職に 踏台にした人 云 余 墓参(天王寺) 韻 0 わ 鑓 す 0 Ÿ. 長 慣 志 1 息 れ 伝 大阪市 加川 同 同 靖真

政治的 墓の草そこの 昼寝でもしている様 米穀 浄 検 1: 查. 規 な 6 尽 金 格 ts 0 升 ŋ 墓 爲 取 脲

ιi

家計簿の赤信 リードして貧乏ゆすりになべンチ ボンボンが博士をもろた頼りなさ 号と云 5 食 い 事: 事 大阪 H

松谷

政俊

同 同

同

同

貧乏クジ引いたと口にしな

海と山赤字になって繰り越 あやかってみたが家裁の世話にい 切れすぎる庖丁妻はもてあ 3 ま L n 受旋 棋 [ii] [ii] 大垣たもつ

子の口にどきんと汗をかかされる 小卒の父がどの子も 上品なお方でしたと 10 雲 ts 族 学 3 1: 好 人 12 す 旅 3 L 大阪 同 伊丹柳飘子 Jui 淀月

見島山

二合瓶

空

血圧のことでゴルフをすすめられ

Fi Fi

成婚から宮

内

庁

角

が

Ł

れ

雑談がすんだか受付むきな な n

子沢山冷蔵庫 風鈴も昼寝し に て \$ い 鍵 る 士: から 用 欲 П: 布 施市 同

残 ŋ 滋 賀 果

蜻蛉

御無沙汰 記 其御無沙汰等。気 等 他人の瞳にどう写ろうと恋に克ち 堺 市

白バイに追っかけられてるスリル 大臣が住まえば道路 補 修 3 れ 貝塚 市

敷かれてはせんかと母がのぞ。企来

便器までとってもろうて楯をつき

屋上のビール思いっ 孫に出す手紙しんどい仮名 き ŋ 遺 笑 V V K 都市

末席で落目無口に猪 ピーチパラソル真昼の恋の休む… 手拭いを借って踊りの輪にはいり 涼しくなると騒音も気にな を 5 也 + 酒 宮市 同 末沢 同 同

花美

葬儀屋も商売サンプル出して見 女教師のえくぼは恋をまだ知らず 人間の欲紙屑 to 蹴 0 て見 3 部

711

鎮浪

翠月

汽車に乗りおくれていて土産選る ピーマンを買い調理法たずねられ 17 敷 th [ii] 小倉美音子

同 同

円。焼ちゅう二合ひや六十円さか げ八割。二割分返納口銭百八十七

バタ公どなりくさるので負けずに なだしじゃこつまみ。雪ちらちら

同業のよしみ笑顔でさぐり あ い 酒 B 市 同 田

本歯

若がえるつもりのジャズへ欠伸する

坂上山 同

椒坊

花火よりアベック気になる水都祭 同

息のあるうちに逢えない人となり さわがれた当時が壁にまだ

可 同

沢田

讃美歌をしみじみ歌うベッド なり 同 口 美喜

杉本 都倉 同 同 求女 鶴

いだったらしい。

同

だが、思いがけない何冊かの 亡くなる

111 柳雑誌社特製

投句用 柳

篓

送 冊(五〇枚綴)三〇円 料(一冊分) 11 四

である。あちらからのお迎えだっ ら、手の出しようもないのだっ 飲めなくなる日が米てしまったの 春吉さんにもたった一夜のうちに た。とに何あれ程酒が好であった なんて大きな声を出すものだか 儀さんは亭主を引っぱたくよう」 ずり込もうとするの あいたた痛いよう。「うちの内 だが、

残すものとては僅かな古着類ぐら な死にかたであった。 ったからと云っても息子や娘等に それは思いようによっては幸福 貧しい人であったから、亡くな

その夜の日記は 夜まで書き込まれて居たという。 吉さんの日記帖であり、 と、それが何と明治末年以来の春 で、息子等が何気なく開いて見る 面が風呂敷包みから出て来たの さかな……円仕入れ、売り上

ヤーナラズト化の和尚と教授対談

奈

良市

内

海

敬太

草ねだる牛の視線をよけてす 病みついて財布の口のあいたまま

告

兵庫

骐

同

河原みのる

消宮さまに

化物に似て潜水夫浮 敢然とこいさんだけ 少年の夢 初孫の声も聞

転

k

4 世

か

初対面意外な

人生

憧れのパリー

・を仕掛 ٤

平

聞

丸髷やなくて女房は

二次会の肴にされる

人者蚊帳広すぎて

停年のさみしさ知らぬ蟬 麦食べて一人も欠けず子が 太っちょも夫にあまえ手にすがり 国内で売るのに英語ばかり 悲しみへ泣くハンカチを持 ハンカチを集めて少女胸を トランジスター聞きつい山の飯が出 公務員だけでは食えず鳅 イティーン湯槽にずらり腰をむ < 気 眠 恋 論 花 る 此 る 物 か が 職 5 6 び 就 を 6 から な 火 夏 教 6 7 5 办多 \$ 見 病 軽 書 来 替 通 n あ 聞 泣 0 便 育 職 振 習 n 7 かい る 話 to え ず n き 3 古 せ 女 Z ŋ 所 n 3 ス Ł 泗 今治 神 大阪府 茶 焊 费 ř 良果 宮市 中市 F 森 市 Ħ क्त 娯 吉本 村上 室田 越智 同 并上美恵子 同 同 同 同 同 同 同 林 同 同 同 同 木村よしを 参無子 千尋 **青風** 凉人 水 子沢山 出直して来いとパチンコ台は言 持って死ぬつも。子無一、金を貯 団扇も呉れぬ店と隣も行き 脱柵を山羊の親子に見つけ 死ぬ勇気ないから生きて行くとき 亡命の様大掃 十代の自転車バスを抜いて 牛売って淋しくかえ ビタミンB打って弁当持って出 おさらえでお寿司もろうた恋だった 喜寿祝三猿となった 妻の愚痴だまって聞くも二 村芝居ボスが主催で野次も 不倖せ迷信信じてみ おしめにもなるわと貰う形見分け お隣のテレビで平和の夢や なる様になるとはうまい御 枝折戸を背に家元の 失恋の肩へ喪 偉くなれもう宿園の見てや 善後策もう告 貴男まで叱ると今度は子をかばい 喜びは皇女にもまさ 17 餉 除 章 白 0 膳 光 0 0 た 味 げ は 夏 3 よ 腹 る 汗 7 < 5 4 気 す を わ 臭 H な 来 行 ts 詰 6 な 33 結 な h 決 か त्तां 九 < き れ 蝶 ず L 醉 1) n 論 3 場 ds 大阪市 伊丹市 ili 民 無 松 大阪巾 须 岩松 100 大和五条市 広島県 形 麻 本 江市 岭市 Ш 概 骐 具 順 市 尾来 菊地 三上 鳥取 藤本ゆ 田中 高橋 山内 小川静観堂 口 司 中西兼治郎 同 同 同 大然 白葩 たか 妖人

> と右のような意味が書いてあった やりかえす何となし眠たい。ざっ

周甫

が何よりの宝だと云う外はないの けられて居たと云う事はそれ自体 なかった日記が細々と明治以来続 ではなかろうか。 ったにしても、家人でさえ意識し 字もよみ兼ねるような文字であ

静水

赤トン

ボ

町

K

編

1

スの干場十代

小屋

7

倖

せ

綴

帰郷した眼に沢庵がデ 雨を待つ挨拶洗濯屋

春雄

絵見

上下のへ 、だて 栗 夜

城

蟠蛇

同士は一対一で愛し合っているの やらにはやはり上下がある。恋人 下はないだろうが親同士の格式と ら十対一となる、いや百対一とな に、その親と親が社長と小使いな る場合もある。 浪曲の文句だが、なるほど恋に上 恋に上下のへだてがない、とは

心斉橋筋大丸前

電話愛三三四四番

さすがは我等のナイトとおごらった

パおくり出してうたたねなる日課

西

官市

パンガロー村

時のズレ封建性は目 土器さがし名士大っぴら泥 お祭りへ金魚のべべも買ってやり 別室で煙草忘れて待 折り畳み傘がどしゃぶり眺めてる 昼寝から戻ればもとの孤独 督促状配達までがそっ 犬小屋の暑いくらしがしてみ度く ストセラーママも読んどきやいおうちゃれ た を 3 It 0 な ts 遊 な れ ŋ n び 3 L 声量 笠 小松市 布 施 岡 市 市 111 竹下 出原 同 筒井 里 同 同 同 田 ーン十 真奇 吉枝 博

和歌山県 城市 千石 同 同 木下 同 快人 一休

宿題の灯を貸りて済

仕:

Ĭ.

物

票をリヤカーにのせて無駄にせず

本の牛乳で腹

を

4: む

耳

6

れ

貝

小谷 同 大石 同 甘美 仙山 汗かいた程に契約ま 二号持つ甲斐性があ 新生活働けば罰金と 除した汗の

始

滞納はしてもビールはやめ けちんぼが儲かる話かとの

られず

王明 市

ぞ

ŧ

海へ来て妻も子供の

声

を

出

朝 テ

0) V

用

大阪

坩

竹内花代子

金廻りよい自転車が

<

光

ŋ

滞

納

同 11 Πİ 月田北海坊 林守株蓮 大学で習わぬ 帽子をかぶれば停年 バルーン早へあ

麻

雀

役

T

٢

ね 12

れ 13 がらねばなる

6

111

SE.

組 ょ n

12

3

杉本たつよ 株持たぬ同士価上り 実 要心が良すぎる犬に起こさ 学割で行けば半分だ 費 配 給 体 温

計

12

枕 3 1)

宇部

iti

豊年

るようである。

川柳人のみなさんにこうしたケ

こに集団生活者のむずかしさがあ

趣味と職場を切りはなせないと

論

C

合

母と寝る末っ子大の字にね

ŋ

間

ılı

縣

あきらめた恋へはげし

蟬

時 む 水 1

同

借金の話もしてるビ

定刻に行けば何時もの一人

丈 食 蔵 Si

け べ

貝

駅

th

お隣もそうめんらし

V +

下 未

N

同

何で喰う女か 十姉妹貰うて

冷 から

庫 え L

なき母の命日好きな

柿 F.

を

d

松

iţi

早起きの派手なうがいはお 趣味ばかり合うても一つ燃えぬ仲 停年に金のかからぬ趣味に 数学が好きで割り切れ ぬ世に疎く 生 年 寄 き 宇 大阪 部市 TH 同 堤 同 板倉天悟空 勝三

羽曳野市

世についてゆく金策 弔電を他人すらすらすらと もの好きを笑い無趣味を笑われる 0) 忙 L 読 3 7 愛機県 鳥井 平田 同

辛抱に馴れた 背番号 恋人に逢う日の簞笥よくき 别 0 根 頭 0 気 ょ 0 < 株 L 憶 0 Z 数 大 阪 市 宮原 同 同

閣仲間のポリが署長で帰っ 信念に生きる啖かが 言訳はこの嘘にきめルージュ塗る 小型選って乗るックージに恋がない 7 来 始 竹原市 鹿市 松井 吉田 同

可笑

末 ع を 出 い ま 5 泳 世 休 < 6 산 暇 海 ず す 平 F 関市 藤 同 同 田 雪峰

倉 古市 田 市 奥谷 可 同 石橋万古人 弘朗

大阪 Th 今西 同 高 生薑 清勝

> うであるが、たとえば将棋だが新 う」と、いうことで課長がやめて とは、なんの課長の面目があろ のであろうが。 まうと、みんながパタパタとやめ 飛車角落してもらっても勝てない ない前者の場合は「あんな新米に くなっていく。これは言うまでも るとそこのグルーブはどんどん強 しまう。しかし課長に強いのがい 米の平社員に強いのがいると、そ 気兼ねとかいうモノがそうさせる この将棋グループはすぐつぶれて てしまうのだ。そこには遠慮とか しまうのである。課長が止めてし 職場の趣味グループの場合もそ

川鳥 実男 俊和 敏子 上の味

> 心斉橋大丸北の辻東へ 御 門

TEL @ 6684

御集会には階上御利用下さい

豊作をおだて予約の

網

か

は

n

笠

岡

111

谷本鈍愚坊

あ

んなに煙草すって忙しい忙しい

石

111 阪 江 ME

麒

斎藤 西 藤

商

売の

コッ今百円

0

儲

Vt よ

な

n 8 L 眼 7

大 松

保夫 章道 孝風 登紀

紫陽花の

濃

日をべ

7

1.

朓

甲子園の土踏むだけで誇り

٢ 0

兵 大阪 Ш

坂上

女ひとりどう暮しても他人

赤旗は

Ti.

十の

肩

重

す

ぎ

西

九紫

山

子の笑顔瞼に 横取りをしたりさ 馬鹿と云う幸福に今日 D ンパスやめて L ウラン かっ たりし 2 の腕輪買 出 \$ た日 勤 生 3 す 本 い M ılı 縣 古田 同 横 同 百 日南 声

賃金の中で大

I.

は

昼

寝

を

th

限

藤

本

星二

大

Æ

自分よりサラリーは安いし地位も

川柳だけはオレよりう

スのグループがありませんか。

旧友と出合えば禁酒 まだ下がる下がるッチャンよう買 子の為に低い姿勢に 月 が土 用の暑さをい 草 ts た E 臥 わ 心 れ 6 へわず れ 3 九 F 腸 阅 Ify 市 果 宮藤 同 亀 崎

朝の山羊乳を搾

れば

細

ds

慈雨

漫步

定期券僕も鯖

よ

む

年. 瞳

4 な

ts

ŋ

大

IN.

īfī

堀 同

風

船

堂

巡査まで変人なりで 不言実行恋の場合は手をに 宝塚うかってやめたように こんどこそ死なしはいと錦魚買 3 U 5 る m 丹 THE 小川 H

静観

堂

通

L

<

n

児玉

不村

亡き父母へ不孝のお記が茶を捧 遭難の記事も物とも こおろぎも鳴いて吉野 子の巣立ち夜が詑びしい老 49. は す 秋 夫 登 0 ŋ 色 婦 げ 鳥 大 奈 阪 取 良 麒 本村 木村 j

夏やせとごまかす娘 夜ふかしが過ぎて時計 なるほどと憎きライ 台風の進路がそれてラジ 週刊誌クイズ以外はめくる はみな売ってしもうてき飲む気 恋 のなっを巻き な iv 1 男 消 だ 知 前 け n L Œ 兵 大 59E 大 西 宫市 MC 阪 版 岡 B 市 県 if: 715 府 斎藤 松本 平. 石田 神 塚 たけ 好坊 夢 風

台風 扇風機 H 初 盆に 曜 を 過 もう噂 かっ H 遠い人か H 7 里 0 鼻 子. X 声 孤 6 連 見 高 児 舞 < た 7 4 0 から 0 る 来 \$ 英 13 初世野市 Ħ 木 水田 大石 斎藤さかえ 木繁太郎 舟

由·央市場風景

立飲みの一 便利屋と云われヘンクツ屋で通 偽学生チッ 目 母と娘の仕合 臍見せて市場 障りは左や 杯今日を トも来な せせ 右 0 夏 -6 ま E. V 出 は 蚊 夏 れ す 帳を吊 真 る 盛 休 火 花 気 暇 ŋ る 島 西 大阪 布 92 河内長野市 取 T 岡 族 岩田 門 村 板 來 高 東 本黒天子 八文銭 三舟 若芽 和楽

Щ 酒に飽き仲居にあ 雷公も赤城の 不甲斐ない男と女医に見てとられ 余生どころかこれ の湯もチップで相当気を Ш からと云う気が 1 立 7 籠 使 n U 西 宮崎 大阪 調 Ħ 萬代句 山 武 田 口 「卯之助 軍 念坊

ユニバー 学に は 探 も羽織を着 ス一位や女房威張 香 る 水 女 紙 0 6 せる稲 T. T 包 2 駅 の出来 り出 装 0) ま 水 から Æ 大阪 神戸 大阪 西 島 Ħ 吉 一治郎 旭峯 丹謡

心

情を

商

湖

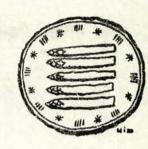
ったのは、部下に50突くのがいた お思いの方はないでしょうか。 まい、アホらしてやれんワイと、 私が撞球を20突いてやめてしま

恐るべし虚栄、 はある。 かったものの、 これが撞球のようなものだからよ からである。今にしておもえば、 ていたかも知れないのである。 とうの昔に川柳をやめてしま もし川 戒しむべし虚勢で 柳だった

いようにしたいものだと思う。 恋にも趣味にも上下の に悲しいことである。 ケースがあるとしたら川 職場の上下によって、 へだてが 柳のため ts

こうした

ほかに ミネラル入 強力パンピタンM 「贝ケダ」



すれちがうもの皆風を切って行き

柳人 一武部香林氏

三代の副理事長として活躍

不一 二田 夫

引越しの荷物となつて手を であろう。

柳は若菜夫人が先輩

新聞の雑吟であった。 になった川柳は、郷里岡山の山陽 昭和3年(32才)はじめて活字

死んだ児の顔を見つけた夏

あまり、眼がしらをそっとおさえ

と、路郎先生は、門下を思うの

「きびしい句だね」

柳友が寄って転宅させてく

たびに畳の上でかすかに動いて 移転通知が、扇風機にあおられる られるのである。七月一日消印の

だったころ、のんだくれの課長の かったのである。24才で阪神電鉄 へ入社、27才で初代動力課の書記 この頃は本名で投句していた。 かし川柳はこれが処女作ではな 鮮人でないと云いけり貸家 馬方と馬と走っていた夕陽

多の俊才を川柳界へおくりだした

淀川文部のリーダーとして、幾

たこ梅のマッチ 課長の席

いるゆえんでもある。

昭和17年に不朽澗会員(鮎美氏

林氏の指導力が大きく評価されて 淀川支部に好作家が多いのも、香 水堂、花村、清生諸氏をはじめ、 武部香林氏(特別会員)である。

らせたというエピソードもある。 った。路郎先生がどんな会合にも、 と出動していたという動勉家であ ずっと一時間前の7時にはキチッ の、その七年間、8時出勤のところ 30才で阪神電鉄を退社するまで と、川柳をものして、課長を怒

委員に指名されるほどの手腕家で 推薦)になり、すぐその年に中中

巨介普天、中島生々庵、北川春

下の信望の厚さをものがたるもの 代の副理事長を務めた人柄は、上 巣不朽洞会三理事長を援けよく三

も投句されていた。香林氏は当時

辺紅衣選の柳壇があって、春巣氏

るが、香林氏がこよなく先生を敬 慕されるのもこうした共通点があ かならず定刻より早目に出席され

で、一日に電話を三百五十回受話 とに原因するようである。 も、動勉からくる過労であったこ のも、いま、無明の世界にあるの の会社員生活にビリオドを打った そうである。健康を害して七年間 器をにぎったという記録があった というのが、非常に煩雑なもの この超勤ぶりにかててその仕事

う川柳夫婦であったらしい。 号の「わが愛妻の句」にもあるよう ように、映画などはあまり観に行 ばれたのだが、今の若い人たちの 歴は四十年を越すものである。前 っていたというから、もうその柳 で、18才の時にはすでに川柳を作 かず、よく旅行をしては作句で競 に、25才と23才の従兄妹同士が結 昭和9年頃の「時事新報」に渡 若菜夫人は香林氏より二つ年下

るようである。

急昇していったのである。 このあたりから香林氏の川柳熱は れ、まったく面食らったものの、 を主柱に「川雑塗青支部」が誕生 文芸部の人たちで中見光路支部長 し、そこではじめて選をさせら 塗料会社にいたころ、

塗料青年 本名で活躍していたが、昭和13

頃、はじめてタッター人で出席し しく接し、高橋かほる選で て、そこで路郎、葭乃両先生に親 御津八幡宮に本社句会があった

甲斐あって、昭和17年10月には「川

入れ方で、香林氏にしても努力の

の一翼となったのである。その一

維神津支那」としていよいよ川維

会が、三越の八階ホールで開かれ 誌」二〇〇号記念を兼ねた川柳句 が、抜けた。 P・Rするために摸擬(もぎ)句 されていた。若菜さんは当時を回 孝三郎、孤蓬(古方)諸氏も出席 会としたものである。艸楽、東魚、 である。この句会というものを たとき(昭和15年3月)はじめて 若菜夫人も本社句会へ出席したの 皇紀二六〇〇年奉祝と「川柳雄

にすっかり魅了されました」と、 ぶのである。 みんなが若かったあのころをしの 「潮花さんの披講するあの美声

柳への情熱

ていったのである。 社会化」へ身をもってブッつかっ 和14年で、そこでは「神津川柳グ の人々に呼びかけ、先生の「川柳 ループ」を創り、近所の人や町会 杭瀬から三津屋へ移ったのは昭

らず、二回も会をもつという熱の 人たちは月一回の例会ではものた 大変なものであった。しかしこの というのだから、香林氏の苦労も 十七音字にまとめるだけがヤット 町会長あり組長ありで、とにかく 川柳を知らぬ人たちのなかには

周年記念句会には、路郎先生や紫 印していくのだった。 香氏を迎え堅実な足跡を一歩一歩 昭和24年には紫香、木客、潮末

糸屑は人差指で丸められ

支部が六つにわかれ、香林氏は異 うとこまで生長し、毎月四十人を 林居で行われたのである。 ったが、新春句会からはずっと香 起った。創立句会は六竜子居であ と「川雑淀川支部」の旗をかかげて 色作家西森花村氏、木村水堂氏ら 月、ここでさらに発展を目指し同 越す盛会であったが、昭和27年11 氏らで「川雑北大阪支部」創立とい

貯金の勧誘に来た人たちをつかま え、あべこべに川柳を勧誘したと をもつようになった頃は、保険や したのである。 いう話もあって、支部の発展に尽 東淀川郵便局三階会議室で句会

していた。 としての香林氏は内外に重きをな 役として、また不朽洞会副理事長 警察から睨らまれ 有限会社「日東商店」代表取締 た句

雑草の如く踏まれておりな

はないのだからー 役人の頭の頑迷さは今も昔も変り 呼び出され、句をよく説明したり が下がるのである。 れらの人々の勇気にはシンから頭 な響語ばかり書いていたので、こ 心・耐え抜く精神」と、いうよう は御用作家として「勝ち抜く」 の句であるが、これが警察の干渉 いろいろ苦労されたことである。 先生が憧閲にひっかかった愛弟子 た句をあげると、 いのである。この号にひっかかっ の程度で発売禁止もやりかねな を受けたのである。今おもえばナ ンセンスだが戦時下の日本ではこ ちょっとベンがそれたが、路郎 私事になって恐縮だが、当時私 これは昭和18年8月号の川御塔 転業や僕は一 無駄足を踏まし 夢のない暮しは秋を耐えか 一寸だけ喋べるに役人供を 公用で来たお悔みのあっけ のために、警察へ何回となく 個の部分品 て府庁聳え (古方一孤蓬 (一笑 (翠光) (幽王)

子はなくとも

の一人として柳名は高かったが、 し、支部いよいよ発展し路郎門下 た香は氏は、句はますます円熟 和27年期の顔料会社へ入社し

> も感心しておられた。 らかである。この点は、 るが、なかなかどうして至って朗 た。よそ目にはさびしそうに見え この川柳夫婦には子宝がなかっ

上へ生まれてくるのである。 でもあろう。 斗志の人によって吐かれることば 力ともなっていたのである。 とに見せるあの斗志が盛会の原動 にファイトがあるのかと思うほど あろうか。そうであるなら何千何 わが社の大きな行事があるときで の淀川支部の慈父ではあるが、 力という子宝がつぎつぎと句箋の あの小柄にしてあの温顔のどこ 老いて子に頼らず。これこそは 「川潮が子ども」と、いうので

視力うすれる

け、その白い空間へ文字を書くの 句を入れる両側から、黒い紙を客 まにか白色の恐怖におびえるよう とになったが、そのころから視力 せて、句を入れる個所だけをあ になっていった。句を書く時は、 緑内障などとは夢にも知らなかっ を強くしたりしていたが、それが る。はじめは老眼鏡のレンズの度 る副理事長の要職から勇退する。 白さに眼が痛むのである。いつの た。句箋に向かっても、その紙の が日に日にうすれていったのであ 昭和30年の冬、十三年間にわた

柳こそいのち

白い障子も、光る窓ガラスにも黒

白への恐怖は日に日につのり、

暗の戦いに身がほそるおもいの何 うになっていくのであった。 カ月間であった。 り、ここに白と黒、つまり光りと て眼を安めることに心をくばるよ 支部長のパトンも木堂氏に譲

いカーテンで覆い、部屋を暗くし

手をはらって、 をしたが、手を引こうとする私の たとき、一しょにアペノまでお供 香林氏が不朽洞へ昨年夏来られ

葉がはき出されたのである。 すが気火な岩菜夫人にしてこの言 に死のうかと思いました」と、さ 界から閉ざされたようであった。 も経たぬうちに、完全に光りの世 ものを示されたが、それから半年 まだ、大丈夫」と、虚勢に似た 「絶望ときいたときは、一しょ

夫人でもある。梅里氏からは友情 くなってしまったのである。 郷友の心からの願いもむなしく、 動車でとどけてくれたり、恩師や の「うなぎのキモ」を千里氏が自 ついに香林氏の験には何も映らな のばかりに食い入ったという若並 誌を目にしても、限、限、眼のも ラジオを耳にしても、新聞、 てる 頰にふれるは秋の手のひら 押売りへ黒い眼鏡をかけて 仁丹がパラパラ妻を呼び立 (34年7月号 (33年12月号) 34年3月号

六十を過ぎて光りを奪われた不

ようにも見うけられた。 いて、何か悟りの道をひらかれた め淡々とした静かな心境になって が、香林氏自身はすべてをあきら 元に想像以上の不便さも思われた 自由さは、その指先きに、その足

いものを私は感じとったのであ と、いう香林氏に、美しい明る 校にも、光りにもなりますよ 「川郷さえあれば、生きて行く

あろう。 想い出のスクリーンに映ることで がほほえみかけてくるであろう にはお下げ髪のころの貴いちゃん ある。じっと眼を閉じると、そこ られるし、光りとも杖ともなるい し、郷里の美しい児島湾の眺望も い奥様をもたれた香林氏は幸福で らの若菜夫人が今日なお仕えてお 貴いちゃんとよんだ少女時代か

うらやましいほどの川柳夫妻の憩 いの安住の地にも思えるのであ ょうしゃな今の新築の家は、この 映画のセットに見るような、し

はここよ 「カットはここよ、 あなたの句

して永遠の語り草となろう。 どもに戻したことは、柳界美談と 状が恩節から贈られ、師弟がとも 席上で多年の功績をたたえる表彰 杖となり目となるのである。 ページの組みまで受情の指先きが 君の指を紙面の上へ持っていき、 と、本誌のページをあけて、 昭和33年11月、不朽洞会総会の

西独クノール社より新輸入



オサドリン錠は西独クノール社が多年 研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。 その作用は確実で 胃腸障害などの心配がありません。 350円・(20錠) 650円

特 集

個 性:

後 藤 梅

私の句について

と浮かんだものです。 彦さんの涙ぐましい弔辞を聞きながら、 尾の句は、食満南北さんの葬儀当日、菅楯 私の周性が覗いている句を選みました。末 句ではなく、それぞれの句に、いろいろな り十句。お断りする迄もなく、飛び切りの いうものは気の引けるものだが、仰せによ 句を出せと言われて、自分の句を出すと

盛り場にちかく 骨董屋背中をまるくして座り 山と山重なり合うて人阻む 収入が無くなり食える世とわかり ただ人が通る堤を見て飽かず 神様仏け様

111 柳 にみ るわが

志

こと 逃走の途中人相まで変り 大阪城ゆっくり戦車 極楽で会えば過労で かけがえが無いとは死んでからの 出て来そう 死にました

柳界のこと、自分のこと 選者は一人にしたい

(2)

儀なくされていると見ることが出来ます。 顔をしている、ここらに問題がありそうで つまり、作家が作家自ら選をして、したり し方ないが、このため川柳は質の低下を余 一の人で行なわれている。句会の場合は致 川柳を作ることと、選をするということ 全く違った仕事であるにも拘らず、同

にある作家ではない。然るに川柳界では、 現在、路郎・水府・紋太の如きは、ザラ

性と私見

老巧と新人を組み合わせてそれ ぞれの意見を出してもらった。

ロ 未知の世界

って見たい。

見えても気がつかないものがあります。 のと見えないものとがあります。また目に 吾々の住んでいる世界には、目に見えるも づけています。 ものがあります。何程学問をしても結論が 出ないものがあり、 た常人には見えずとも、発狂人には見える 私はいま未知の世界と取組んでいます。 それを未知の世界と名

う。その血は間断なく人体をめぐっていま 立っています。皮を切れば血が出るでしょ ですが、そうでもありません。まず人間の うことです。川柳とは余り関係が無いよう うことを感じている。そしてそれは、或る に見えぬ大きなものに支配されているとい 身体ですね。これはみんな円いものから成 つの円の軌道の上を走らされているとい 私はいま、人間の営みというものは、 E

いでしょうか。

一この人々には権威ある選に没頭して貰

ろうと思う。

句を作ったり、随筆を書いたり、 選者は選をするだけで収入が安定する うこと の選をしたりする仕事は止めてもらい 二十円ぐらいが至当でしょう。 ように、作家は選句料を支払う。一句 新聞

こぼれては咲きこぼれては咲き朝 作家同志がこんなことをたまたま話題にす 思うが、私はこうしたことを虚心に話し合 ると。「そんなこと」と一笑に附されると

達こそ、大選者の待遇を与えるべきではな そう特別な待遇を与えていないが。この人 す。血の出るのを防げば元のままです。 いと感じ、あわてるから破綻が起きる。 生の喜怒哀楽は、みなそれに近い状態であ

です。 うに、太陽の周囲を、地球が廻わり、日夜 す。天体の運行もそれと符節を合わしたよ 動きにつれて自転しているという感じで 奔馳する。但しこれは目にもとまらぬ速さ 吾々の周囲は、目に見えぬ一つの円の 禍福はあざなえる縄の如し」とも言

鈴の音が、何かのささやきともとられぬこ これが私の作句目標のようなものになって ているとしたら、真理はまだまだ発見さ 味えば、天理を知ることが出来る。ここいら はまた人の声であるから、円い心に返って とはない。川柳に詠まれるところの種々相 であり、虫が啼き鳥が啼く声が、夜更けの風 れているとすれば、それを知るのは心の眼 います。私達のまわりが未知なもので包ま が鍵でしょう。 れ、数えられるものがあるにちがいない。 私達の問囲も、 そうしたものに支配され

絵になる川柳

作ったか」と苦笑させられています。 すが、いつも、「また画にもならぬ川柳を なる川柳はむつかしいようで楽しいもので 真理が用意されなければなりません。絵に 描けぬ川柳である場合には、 になるような川柳を心掛けています。画に 絵川柳ともすこし意味が違うが、私は絵 余程の批判か

忠 師 12 教 え を

栏 谷 湖

Щ

孫と寝りゃ亡き子のにおいそのまま 子に借りのあるハイキング今日は晴 嘘言えぬのに仲人を頼みに来 自己批判酒に敗けたと思う日や 招待へ無視されて居る席に坐し 父さんの背な洗おうかと言って呉れ

年とって涙はもろき物と知り 盗聴の出来ない耳も年なれや 八歩まで希望通りの子なりしに 数の子を噛む音冴えて春たのし

の血とし肉としたいものです。 価する批判はもとより率直に受け入れ自己 批判を耳にしたり読んだりしますが傾聴に 忠実に自己の「ペース」を着実に守り一層 見は目下のところ持ち合せがありません。 高きに昇りたいばかりです。川柳に対する 麻生先生に師事して居る限り先生の数えを 川柳に対する意見なんておこがましい音

と頭をかしげざるを得ません。 を切開手術してやるべきと思います。 は決然立って反論すべきは勿論それらの盲 て居る様な「川柳?」があるのかとちょっ 川柳に対する意見と言うような意見では 高鷲亜鈍先生の本誌387号に指摘され いやしくも歪められた川柳批判に対して

> 句評「リレー」をたのしみにして居ります。 評には只々頭が下がるばかりです。毎号の 白く拝見して居ますが皆様の深く巾広い句 戴きました。毎号の句評「リレー」大へん面 ありませんが思いついたままをのべさせて

新 新しい皮袋に 酒は

111 生

川柳に類想や暗合が多いのは十七音字とい 事川柳として短い生命を得るにとどまる。 がある。この線を越えたときはわずかに時 柳においては対象は常に世上普遍のことで いわれる川柳だが、ここに画然とした差異 てはならない。短詩型の中で最も散文的と いう。新聞の一性格を表わす言葉である。 が、人が犬に咬みつけばニュースになると なければならないし、皮相の興味に惹かれ 小説にもそういった一面がある。しかし川 犬が人を咬んでもニュースにならない 欠食児父の働くとこ知らず 再婚しまた貞節の道をゆく 未亡人も遺稿の結び聞いてい 暖簾分けどころか定年制を布き 他所者のかなしさ景色ほめて住む 吝嗇も継いだを養子気がつかず 本殿へ通訳ぎこちなくお辞儀 幕間にも社長は思いつきをメモ 特派員自然の描写から始め 嘲とは知らず後妻も笑うなり ず

> 類想の中に典型を打ち立てるには作者に強 超越して独自の句境を切り拓き、あるいは う制約の外にここにも原因がある。これを 独創性が求められる。

どんな角度から詠んでもいいわけであっ 民生活の哀歓、あるいは日常身辺のことを でない。川柳は大衆のものであるととも する私川柳もあり得るし、 に、作者自らのものである。私小説に対応 の精神が要求される。川柳が歌う句から読 には磨かれた知性がいる。作者ばかりでな む句、考える句に移ってきた所以である。 く鑑賞者にさえ深い洞察力と鋭い社会批判 複雑巨大な社会機構に打ち勝ち詠い上げる 図りつつあるが本来が自然風詠であるに反 性と知性が最も必要とされる。川柳は社会 詠である。物心両面にわたる現代の重みと の鏡である。俳句も近時生活面への浸透を のでなければならない。そのためには社会 もちろん川柳は何物にも拘束されるもの 現代の川柳は現代の鑑賞に堪えられるも 川柳はあくまで人間風詠であり社会風 人間の弱き、

の底に肌のぬくみというか、敷いがほしい の詩情に乏しい句は困るが。また冷徹な眼 望ましい。標語のようなイデオロギー露出 代的なエスプリを持つ方がよいと思う。玄 が、どちらかと言えば技巧がまずくとも近 がないものは価値が少ないとされている。 ている句でありたい。写真でも主眼の投影 を出していて、その奥に作者の眼がのぞい 柳の根本的なものである。単なる人間素描 認識を改めさせねばならない点が多い。し かに生活の裏付があり、どこかに社会が額 すことが肝要である。人間を詠ってもどこ より社会の虚飾の中から真なるものを見出 かし社会性に根ざす批判詩という立場は川 はなく、むしろ理論と実作をもって世間の を期待するからといって安易に妥協するの 家と変りはない。世間が川柳に諷刺ばかり は危険である。低い民度には媚びるべきで 人好きのする句より万人の

共感を得る方が よく内容と表現は車の両輪に喩えられる 美や人生を追求する点では画家や小説

短詩文学作品展 作 会 品 期 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品 10月7日 (水) 8日 (木) 9日 大阪美術俱楽部(東区今橋二丁月堺筋西入 目午前十時—至午後六時 員には粗茶の用意もしてあります (電話30九六二〇番

ひら

会

場

と考える。時勢は何材が豊富な筈なのに川

(第三回)

秋に

価

売約に応じます。会場係に御中出下さい。

半折・横物・色紙・短冊・陶器其他 (金)三日間 催 主 関西矩詩文学連盟 後 援 大阪市教育委員会 詩

誌

柳人がとかく見逃し勝ちなのは惜しい。 川柳は詩であるかという点もよく問題に されるが、あまりこだわる必要はない。ど ちらにしても川柳自体の価値に変りはない のであって、川柳として立派な作品を残す ことが社会での地位を決定する。社会批判 は耐信に欠けるというが、中野重治らの詩は詩情に欠けるというが、中野重治らの詩は詩情に欠けるというが、中野重治らの詩は詩情に欠けるというが、中野重治らの詩は詩情に欠けるというが、中野重治らの詩は詩情に欠けるというが、中野重治の心理論で あったが、今や現象を説明するための理論で あったが、今や現象を説明するための理論で あったが、第針盤としての川柳理論の確立は柳界 当面の課題だと思う。

を作り続けたい。

0

わが個性と私見

高

薫風子

> 私が右の十句を選出したところ、柳友の 一人はこれらに私の句の真の個性は出てい ないと言う。今更個性を述べることの難し さを思わされたが、私の好きな句を抽出す さを思わされたが、私の好きな句を抽出す さを思わされたが、私の好きな句を抽出す さを思わされたが、私の好きな句を抽出す と信ずるので、敢えて句の変更はしなかっ と信ずるので、敢えて句の変更はしなかっ た。私の川柳経歴は私の生きてきた年数の た。私の「御性などと言えるもののあろう 答がない。私は川郷を始めて五年間はデッ サンの時代だと思っている。

謂わば正攻法的な作句を旨としていること 現をなるべく避け、真っ向から詠み下す 性が稀薄だと言われても致し方がない。私 柳性が薄いと言うのであれば私の句は川柳 いる訳で、人間の臭気が濃厚でなければ川 して重大な関心を持っている事を証明して 的な構成が目立つ様に思われる。季感を持 しきものが出ていて、唯美的な傾向と絵画 としての良し悪しは別として、私の個性ら かし今ここに句を並べて見ると川柳の作品 手当り次第に句にして来たに過ぎない。し 思う。私は又、「本心を二伸に女心かも」 述べるのに触れて置かねばならぬ事柄だと つを心掛けて来た。これも私の句の個性を と、句のリズムを極めて尊重することの一 は作句に当って、常々技巧を弄する如き表 つ語の多いのは私が人間と同様に自然に対 だから今まで目に映り心に触れたものを 振り返りはせぬかと女まだ立って」のよ

り下げて見たいと思っている。

られてくるのである。これと対照的な例と 写だけではやがて鼻もちならぬものに感じ 多い柳多留も、下期作品では私小説的事実 に止める。一篇から五篇辺りまでは傑作も の都合で一、二の事柄を簡単に述べること うか。又川柳の作品をしてこの精神の高さ ならば、私達は芭蕉がこの世で精神を除い は芭蕉の精神の高さである。現代の川郷を して、芭蕉の句がある。芭蕉の作品の高さ 処は多々あるが素材主義に頼る皮相的な描 か。表現・省略・瓢逸等の技巧に見るべき た欠点を明確に示しているのではなかろう の偏重や、上滑りした風俗描写のみに頼っ りと断言しても異論をさしはさむ者は無い と言われる所以もここにあるのではなかろ ならないと思う。路郎先生が人間陶冶の詩 示していることにまで思いを致さなければ ては何物も取るに足らぬことを作品の上で して柳多留の轍を踏ましめぬよう心掛ける であろう。今一つ、 にまで至らしめた句集は、実に「旅人」な 次に川柳についての私見であるが、紙面

ない。
ない。ない。

演ずるに、一般の俳優が加何にして腹を減菊五郎は一本刀土俵入りの駒形茂兵衛を

何集

明

送価

らした茂兵衛を演じようかと努力したのに対して、如何にして空腹を見せまいかと 演技するのに努めたと云うことである。空 腹を表現する演技にも、空腹に見せようと と変あるのと空腹を見せまいとするのとの相

双私達は小学校の高学年になれば、既に 別のた筈である。赤色を明るい色とのみ思 別のた筈である。赤色を明るい色とのみ思 い込んでいる人が柳界には多いのではない だろうか。

能の最も暗い部分に効果的に赤い色をぬったあの手法、あの感覚を私は非常に尊いったあの手法、あの感覚を私は非常に尊いためと思う。事実必ずしも真実ではない虚構も、非常に屢々事実以上の真実性を持つことを私は痛感する。虚構は写実と同じ荘の高さと精神の深さに思いを致す時、道はいよいよ遠く験しいことを思い知らされて、唯々駑馬に鞭打つのみの非才な私を自覚せずにはいられないのである。

女筆にて春の曙秋の月

(タル九四)

るであろう。

石山だから比叡おろしもあた

(タル四三



ている。

富 士 野 鞍

巻から書き出したといわれて 源氏物語を案じ、須磨明石の 石山寺に籠った紫式部は、 明石も須磨も外ならず式部入 豪であった。 で源語、二人とも稀代の女文 草紙」をいい、秋の月は石山 「春の曙」は清少納言の「枕

いるので、

石山は女筆指南の元祖なり 四

今以て色のかわらぬ物語

活を書いたもので、きわどい と多くの女性との恋愛奔放生 源氏物語の内容は、光源氏

とも作られている。

比叡おろし源氏四五帖ふきち

ところまで筆が及んでいる。 色事の書籍はかたい所で出来 石山で出来た書物のやわらか (タル三五、拾五)

馬

祖であろう。 女筆は女の文章家で、源語と いう大作を書いたのは正に元

これは古歌に

月かげは

石山やにほの海てる

という句が作られているが

(タル四一)

色のかわらぬで紫を暗示し て、ほめている。 (タル五〇)

の文句取りであり、また

外ならぬかは あかしもすまも

石山で須磨や明石の物あんじ

(タル二八)

(タル四一)

石山で紫女堅くない物を書き

であった。そして後の十巻は

おりおり家へ帰って書いたの

は、上東門院へ出仕した後に、

の源語との対蹠に興味を感じ 石山という堅い感じと軟文 名高きは石で砕けた物語

(六八タル)

一二帖まで色文と所化おもい (タル六二、七三)

にはわからなかったであろう。 はじめは何を書くのか寺僧 祭りの喧嘩まで書いた物がた (タル三一)

になる。 そこまで書いたら発禁もの かんじんのうまみは式部書か 味までは書かぬ雨夜の品さだ 四四)

最初に出来た部分で、玉鬘の 集めて、栄華を極めるまでが 尚侍や女三の宮のことや、 から六条の院に多くの寵姫を じめの「桐壺」から「少女」 そ十五年程かかっている。は のあたりまで、即ち源氏出生 がこの大作を書いたのは、凡 橋」となっている。実際式部 一空蟬」「夕顔」のような券 最後の五十四巻が「夢の浮 (タル四三

> 死の前に書いたのである。 部」と呼ばれていたので、そ 源氏物語に因んでつけられた れも川柳に詠まれている。 のであって、その前は「藤式 紫式部という呼名は、この 物語書く頃はまだ藤式部

(" 六五)

座

色

の

紫

に

なる

秋の月

紫に湖水で藤の色をあげ

藤式部時分は色もまだ薄し (タル一四〇)

紫に染らぬ前は藤椒

藤色を濃く書いてから名を残

夜書いた物語りゆへ夢でとめ

り多くの歌がのせられている も数えられ、勅選集にもかな れ、中古三十六歌仙の一人に 定家の百人一首にも 家集に「紫式部集」がある。 式部は歌人としてもすぐ めぐり逢ひて見しや

友達に侍りける人の、年ごろ が入れられてある。この歌は 新古今集」に「早くより童 つきかな

(タル五四)

藤色を紫にした物がたり

(》三六)

(川 五九)

(〃 一六七)

赤染衛門と並べて、

部」と詞書してのせられてあ ひて帰り侍りければ 紫式 にて七月十日ごろ、月にきほ 経て行き逢ひたるが、ほのか

百首にも源氏一帖式部よみ (タル四一)

「雲がくれ」の巻が

清少は早起紫女は膂っぱり (タル一四九)

れをシャレている。 るとも」であり、紫式部は 夜半の月」であるから、そ 夜をこめて鳥の空音ははか 同じ百人一首中の閨秀作家 百人一首の清少納言の歌は

京樂と江戸準百へ月をよみ 江戸染も京染も入る百人一首 (タル二八)

月が詠まれている。 ぶくまでの月を見しかな」と て赤染衛門の、歌にも「かた 江戸紫と京紅で二人を表し (" || ||

でいる。 これも京紅と江戸紫を詠ん 京都では衛門江戸では武部な (タルニニ)

それともわかぬまに

雲がくれにし夜半の

紫女赤女虚々実々の物語

と紫の源語五十四巻である。 赤染の「栄華物語」四十巻 (タル | 110)



戶 \mathbf{H} 古

やしい美しさ、それが飛鳥の美で るのであります。やや病的な、あ

に師の選にあずかった句です。

表題は川柳雑誌三八八号川柳塔

の頃でありまして、それは日本国 ばしてゆくのです。 かしらにおされはじめていまし 大和一つにまとまり、天皇がその わかれていたいくつかの中心が、 が、そのころ九州、大和、出雲と はじめは三世紀ということです い史書によりますと、日本の国の ったのです。すなわち、中国の古 めてぶつかった危機の時代でもあ 家というものが出来てから、はじ た。そうしてその余勢を大陸にの 飛鳥といえば六世紀、聖徳太子

仏さまが多いのであります。面相

な頭でっかちの、ちょちょら短い 長いのや、金堂の脇侍にみるよう 世観音にみるように非常にひょろ 芸術時代で、百済観音や夢殿の対

った両眼は杏型で、上瞼の線も、 も異国風そのままで、やや釣り上

下瞼の線もともに外側に反ってい

ていました。もっとも当時の半島 韓、弁韓ととじこめられてしまっ ら、半島の原住民は南に馬韓、 鮮半島をもしたがえたものですか を通じて紀元一世紀をはさんで前 後四百年、大へん栄えました。朝 中国史に漢というのは前漢後漢

らいであります。

しかし釣合いが悪いからといっ

わずかに東洋的なものを感じるく まして、鼻の二等辺三角形だけに

だからこそ一そう美しいともいえ

く、けっこう美しい、いや、それ て、決して醜いというのではな

> 手にもどると、馬韓は百済に、辰 く、国家的統一もできていなかっ 民は漢に刃向える程のものはな 漢のあとをうめるように北方には 韓は新羅に、そして退却してゆく に漢がおとろえ、半島が半島民の たのです。 高句麗という国が出来上っていっ たのでした。しかし二世紀の終り

時に出来ました。

と、久しぶりに西の京へ出かけた

丁度阪奈街道が全通したすぐあ

白鳳時代がこの薬師寺なのです。

法隆寺に飛鳥時代を見て、次の

飛鳥は半島の百済から直輸入の

うような役所をおいたのです。こ 那日本府という、総督府とでもい 相当します。 皇后の三韓征伐といわれるものに ている大陸出兵なのですが、神功 れが年表に紀元三九一としるされ 新羅をしたがえ、弁韓のあとに任 上って、半島にのり出し、百済、 それに応じるように日本も立ち

ち八世紀にできたものであります 歴史はずっと後の奈良時代初期即 ているのですが、これら日本製の 三韓征伐は古事記、日本書紀に出 中年以上の方々に親まれて来た

> が、その母胎といわれる聖徳太子 かれた歴史が存在しなかったのも をもっていませんでしたので、書 文字を伝える前には日本人は文字 半島から百済の博士王仁が論語千 のであります。とにかく五世紀に とはなお二百年のへだたりがある でありまして、三九一年、四世紀 の時かかれたものも六世紀のもの て語り部といわれる、物憶えのよ 道理であります。五世紀以前は全 いたにすぎません。 い人々によって語りつたえられて

り部の老婆やヤマトタケル自身の の物語りはすべて実在とはせず語 頃となっていますが、そのシナリ くるのは紀元でいいますと二世紀 れています。ヤマトタケルが出て 人気を呼んでいる作品はヤマトタ 得ましたが、この日本建国神話で 生」のシナリオを最近読む機会を 封切られます東宝映画「日本融 史上実在であったかどうかは疑問 口から語られているのでありま オの中でもアマテラスやスサノオ ケルの物語を中心として組立てら びでもわかるように、日本統一の でありますが、この映画の筋の運 過程における犠牲と困難とをこの 人のヤマトタケルに集約したも 話が一転しますが、今年十月に オッスといわれるこの人物が

雅号由 来記

仲。 どんたく

何となく語感が好きだつたからです。 はオランダ語のゾンターグ即ち日託と云う意 機と族がよく出るので号を「せきたん」とし であると観じ、と云うのは後で付けた理由で 味らしく療養は人生行路における天駒の休日 た処ふざけていると叱られました。それで、 なものを作り楽包紙に書いて投切しました。 ありまして、すすめられて初めて川柳みたい で居りました。ここに体温川柳会と云うのが 「どんたく」と改めましたが「どんたく」と 四年程前千石莊僚養所の大部屋で寝ころん

りかえし昔はよかったと述懐して 紀の日本の姿をそのままあらわし るのですが、この辺の事情も六世 られ、最後に悲劇的な終末をつけ 集って相談した頃のことをいうの ています。追われ行くオウスはく と異母の姻戚大伴一族にうとんぜ います。アマの岩戸の前で神々が

最大の規模をもった陵をのこして とか応神とかいわれる天皇が世界 あったようです。その頃の、仁徳 はほんとうにおおらかな時代でも 紀末から五世紀頃にはみられませ した、そしてそれは百年前の四世 む年は聖徳太子の頃の日本の姿で んでした。半島進攻の前後の日本 こうした豪族あるいは骨肉相喰

かわり、半島は政策の失敗で手離 六世紀に入ると様子はがらりと

いることでもうなずけます。

ウスは長子でありながら、異母弟

トタケル、即ち景行天皇の王子オ のようであります。映画ではヤマ のと考えるのが最近の史家の見方

化の改新によってはたされまし ましたが、その志は数十年後の大 きな理想を抱きながらなくなられ と努力されました。今に残る太子 それから特に仏数によってこの国 内は又争の巷になろうとしている 取られるのであります。太子は大 の十七条憲法にその心がよく汲み を平らけく、安らけき国にしよう のです。文化人聖徳太子は儒教と さねばならなくなりましたし、国

ったことを思いますと、大陸にそ 引つづいて唐文化の輸入に忙しか 時の日本が、聖徳太子の遺隋使に 同化力の表れとも見えますが、当 ません。これは今いった時代精神 の根源を求めた方が至当かとも思 の反影とも見られ、日本人の強い には飛鳥の不健康さはもう見られ 諸仏に見るのびのびとした姿の中 力は上向いて来ました。薬師寺の たものでありました。再び天皇の 化というのはこの空気の中に生れ 権の実現でありますが、白鳳のケ 大化の改新は天皇中心の中央集

には無視することの出来ない時代 いるのでありまして仏教芸術史上 い中では北魏はややおちつきを示 であります。そうしたあわただし はかない運命とを背負っているの はやはりその国のおかれた乱世と 北魏系のものでありまして、北魏 し、華北に大同の石仏等を残して 飛鳥芸術は中国の南北朝時代の

> らでもありました。 の身分や家柄を無視しはじめたか に外国の影響をうけはじめかつて ているのです。それは唐が開放的 丸味をおびた庶民趣味に転じかけ 神経質な貴族趣味は次第に温かい が、漢の末頃以後中国を支配した をうけついだのが唐であります。 白鳳時代はまだ初唐ではあります その南北朝時代が終って中国の 一をとげたのが隋、そしてそれ

> > 下瞼が直線化している所など日

八の好みに合って来ています。

ではありました。

柄を重要視し、系図の偽作などが ましたが、時代がすすむと逆に家 イプにしても、貴族趣味の盛んな 盛んに行なわれました。美人のタ 漢はもと匹夫の建てた国であり

酒

清

灘。魚 崎

大塚合名会社醸

図や、薬師寺蔵の吉祥天女図の様 日本にも今残る正倉院の樹下美人 南北朝時代の顧愷之の美人は胸の たいものでしたが、唐に入ると、 せまい柳腰、呼吸器型とでもい

> 四方四神、青竜、白虎、朱雀、支 ることも出来るのであります。 がもっていた気字の大きさにふれ 武が彫りこまれ大化時代の日本 神を思わせる土人さらに中国風の リシャ系の葡萄唐草、インドの蕃 美しく、ことに本尊台座にはギ 黒光る薬師寺三尊はたくましくも も傑出した美しさを示しておりま す。当寺金堂のチョコレート色に たすぐれた諸点を完全に具えた最 楽師寺東院堂の聖観音はこうし

凍れる音楽とさわがれているもの 東塔こそは視覚化されたリズム、 なのであります。 たからでありますが、この薬師寺 東塔とは今はなき西塔に対してい つの白鳳の建築が東塔なのです。 この楽師寺にのこっている唯

であることは申すまでもありませ 細かく計算され、設計されたもの とでつけたものではなく最初から カバーの様なものですが、勿論あ るのであります。裳階とは本来は と交互に一層づつ裳階がついてい り出した屋根は六つ、本来の屋根 す。三重ではありますが、軒を張 して、他に例のない形式でありま この塔は本米三重の塔でありま

> どんなロココよりも美しい詩をか なでているのです。 の天人を配する木煙が西洋美術で るのであります。塔の上部の九輪 ところを得て、所謂リズムを感じ いえばロココ式とでもいいたい、 には世にもデリケートな二十四人 軒の稜線をたどらば長短その

> > ¥ 1.500

影響をうけた天平時代のものです ゆくのです。尤もこれらは盛唐の なボリュームのあるものに変って

充分なまるみとこころよい釣合の が、それにさき立つ白鳳の諸仏も

へしい諸像であるのです。しかも

ます。 鳩が舞上り、舞下り、とまってい あたり木煙のあたり、三羽、五羽 ているのもあります。塔の九輪の います、中にはマイクまで用意し こここに一団又一団説明をきいて 東塔を見上げながら境内のあそ

当講師の奈良県嘱託M氏のお話を 独断が去来してくるのでした。 ききながら、私は私なりの幻想や へ来てしまいました。その日の担 私の長話もとうとう楽師寺東塔 私はお話をききながら

東塔の棟でささやく鳩と

たが、私はこれ以上変える事の出 をかえて行きました。そして投句 メモの句はその度びに少しづつ形 もきこえてくるかに見えました。 ような気がいたしました。ささや 米ないところまで米たように思っ た」はむしろ散文調でもありまし つかったのです。「講義になれ く如く、呼び交う如く、鳩の陸言 音楽を融かすものに場をみつけた とその場でメモしました。凍れる 「講義になれた」の中七がみ

130°の広角ルーフ型で、 ンに比べ筆記角度が広く も和文でも同じ調子で書けます。

MIDNE

世界で初めての 型ペンの 設計

一一九五九、九月

後六時から道頓堀文楽座別館で開 会うなつかしさは又格別のもので 本社十月句会は十二日 いただきた

南海電鉄川柳句会(大阪市) 杏 林 期橋牟田 十二日 柳会

九月十七日(木)午後六時半から

ある。多数来会されて秋の作句シ 催する。句会場で珍らしい顔に出 ーズンを盛り上げて 病院三階講堂で開催。 火)午後七時半から長堀 (大阪市) 句会は九月二 南区医師会文化部

▼川雑婦人友の会五周年祝賀句会 国光堂で開催。 は九月二十日午後一 大阪遺信病院川柳会は九月十九 以上路郎主幹出席。 午後二時から五階会議 時から諏訪の

▼川雑岡山支部句会は八月二十二 句会は九月十三日繰上げて下関駅 森中島邸で開催。 ▼川雑下関支部 会議室で開催。 (下関市) 11柳尼

日日赤岡山支部で開催。 九月十九日鉄道俱楽部で開催。 楽部文化部秋季川柳大会を兼ねて 川

構岡山

支部句
会は岡山

鉄道

県

大会は十 ▼堺市民文化祭参加第十三回川柳 月二十日夜横山一 雑備前支部 月 日 (岡山 (H 声居で開催。 [県) 句会は の旅に出発、 た。 ▼路郎主幹夫妻は九月三日信州へ

九日午後帰阪され

会費五〇円。 地・家元・歴史席題 催。兼題走り書・サ から堺市大小路府立労働会 1 三題当日発表 V ン ・ 団 館 開

築山快夢起氏夫妻 柳大会は九月六日 者八十九名投句者四十二名となか 時から竹原市照蓮寺で開催、 ▼竹原川柳会主催の なかの盛会。 ▼こまつ物故柳人 追悼句会は九月 (日)午前十一 第 一回近県川 出席

ら東町妙円寺で開 一十日午後五時か

後五時半から黒田 は九月 四 種あかし・会費百 がら・小さいもの・ くさめ・及ばずな 十八番・甘える・ 大会は十月十八日 (日)午前十時から 。兼題丸と四角・ 商工会議所で開 第 台市東二番丁仙 回東北川柳

・コクヨ川柳会(大阪市) 波の親和クラブで開催。

(金)

八月十七日が私共の結婚四十五年記念日、めと五年で金傪とカノラにおさまつたー



留守番・信仰・欠 点·風呂敷·遠慮· 年・名物各題二

題投句は十月十五日迄に長崎市岩 町 ノ三五赤瀬紅短 冊宛。

郎氏に浅間温泉梅の湯に案内され 歓談された由。 濃からの帰途、 路郎主幹夫妻は九月八日、 松本市の石曽根民 幽

時半から曽根崎警察署講堂で一時 間半に亘り「警察官と酒」と題し て講演、 ▼路郎主幹は九月二 路郎主幹は九月二 好評を博された。 十一日 十三日午前九

時からニューミュンヘン三階での 1午後六

0.4

杏林川柳会の高十周年記念句会(大阪) 前列向つて左から一南朝寿・牟田一哲・田中島耕・福島正建・ 中列・平長大希志・山川阿茶・中島生々廉・織生茂乃・線生路郎・宇野鴉 後列一中島小石・岩崎一伸・岩泰三・河村場川・高水ဆ文・海野北昌史・ 生路郎・字野猫三郎・安隣彌枝郎 ・海野比昌史・木村無名株の諸氏

して安着を読む茶がうまし」の句 幹夫妻の帰阪を安堵して「ほっと 関西短詩文学連盟主催の作品展打 信を寄せられた。 合わせ役員会へ出席。 金子吞風氏 (上田市) は路郎主

会館改装に伴い八月二十 司店阿倍野橋近映地下は、 松江梅里氏 (大阪市 の店大万 六日より 近映

C 等を各人へ回覧して作句に精進し 句会も軌道に乗り、 一カ月間休業されると。 川柳とは何か」 いられる由。 本村交福氏 (大阪市) p 路郎主幹著 川柳雑誌 から職

氏に連れられて来られた土地だけ の温泉湯に一泊、 に無量の感慨にふけって居られる ▼後藤柳悦氏 十五日家族連れで市内から三里 (黒石 每年亡父蝶五郎 iti は八月二 程

病院三階三〇三号室へ入院加療中 害のため、 ▼吉田圭井堂氏 九月七日大阪市大附属 (堺市)

会に出席され 六日竹原川柳会主催の近県川柳大 ▼直原七 画山 (岡山県) は九月

流素謡会を開催 三田(田) ▼直原七面山氏 後藤梅志氏 関西電力打出寮で観世 (大阪市) (岡山 県 は九月十 は八月

二十三日玉野病院川柳会夏期大会

出席、

「川郷につ

て

と題

津温泉に遊ばれ「山気清澄灘から 日飛弾下呂温泉に、 提げた酒の味」の句信を寄せられ て柳話をされた。 ·梶川蘇堂氏 (西角 市 一六日は片山

一日の小阪座の大事で類焼され営している映画館内の売店が九月 ▼不二田一三夫氏 1: 月原省明氏 日の小阪座の火事で 行新居浜支店長に栄転、 同情に堪えな (新居浜 (阪市) 市 0 程 経

がきを頂きました。

々」と云ういとも夫婦愛の難つた二度目のお婦 れば小生の健康がどうなるか判らないので云 て行ってやることにしました、今年決行しなけ

の日の午後から同郷の客となられた。 心臓へ着くとの予定が狂わずに選ばれたのでそ 大阪を売つて途中本曾福島で一泊、翌四日に無

権臨九月号を予定通りに発送出来たら三日に

任された。 日大阪交通局総務課長の要職に就 無事着任された。 ▼橋本緑雨氏(大阪市) は九月一

山高原に された。 都別府の観海寺杉ノ井旅館に一泊 四日豊前富士と言われる由布山麓 ▼速水真珠洞氏(福岡市)は九月 高原に一日を遊ばれ、五日は泉 小田ノ池・山下池から城 湯煙りに猿を育てて小

柳界のために喜びに堪えませんと 川柳鑑賞」拝読、 ▼福永泰典氏(京都市)から「新 貴重な著として

路

郎

御

夫

妻

を

んで

▼国弘半休氏(山口県)から老人 日の坐りだこ見直され」 寿を寿ぐ寄信があった。 の日の九月十五日に路郎主幹の長 寄信があった。 「敬老の

年代順に掲載されている。 えから発刊された。昭和十六年か ら三十三年までの七百二十六句が 西成区山王町三ノ三五番傘ひこば 文オペラ」が八月二十三日大阪市 ▼岩井三窓氏(豊中市)旬集「三

なった。お祝い申上げる。▼勝谷 会館で華燭の典を挙げられる事と 六日竹村都喜子さんと国際見本市 のため松江市立病院に入院加療 山川児氏(松江市)は心筋硬塞症 ▼尾崎方正医博(大阪市)は十月

れた。▼富永夢路氏(相生市)は 市)は大阪市阿倍野区旭町三ノ五 浦へ転居。▼辻川喜仙氏(大阪 兵庫県相生市相生南海岸通り網ク 新居浜市泉池町一一〇六へ転居さ た。 県児島市下津井三五二へ転居され (電話戎母九九〇三番)へ転居。 ▼月原省明氏 恵二朝氏 (岡山県) は岡山 (新居浜市)は

> 院楼上で開催される。 ☆新会員紹介

語中島

九月二十九日 常任理事会

南区三休橋南 小児科診療

会

T.

藤甲吉

(青森市) 正会員

一三夫氏推薦

九

月

曲。

A

伊

原

明

林

(玉野市) 正会員

栞氏推薦

永三舟

(西宮市) 正会員

栞氏推薦

改号された。日満氏が名付け親と ▼浅野達夫氏(米子市)は至高と

会会員であり川雑松江支部長とし 職にあった。 葬により盛大に執行された。氏は 江市青年会館で松江市公営企業局 て活躍、松江市公営企業局長の重 葬儀は十二日午後二時より松 九月十日午後十二時十九分死 松江市でただ一人の不朽洞

集するからと、「奥しなの」が世 中村紫痴郎先生の隠居所)で小

〈信第三日目の午後から無 心庵 日の両日は長野市で国鉄の全国大 通知された。所が実は九月五、 話役となって、 句会案内を電報で

むのを待ち、

に消えんとする間、御夫妻の健康を祝福するた

均常は五時頃終り安代の山は静かに夕靄の中

何物かを備えて居られるように拜しました。 腹脳の全てに現われて一種蜂くも亦犯しがたい

く、尻を半分持ち上げて大会の済 缶詰になっていたので気が気でな

会があって、

柳児、

民郎、

私など

川柳人を宜して以米、あらゆる風質に耐え、酒

節を貫き来たつた散斗の跡が思いなしか、師の

ました。 代へ駆けつけ

じめ敢然として職業 りお動を取られたナ たのを忘れてそう思 初対面という訳でし げ、奥様には本当に と目分の禿げ上がつ 今拜接して、矢郎

じて私だけ安 一時半頃辛う

れたようであります。

うカップ型の杯で御夫妻には帰に珍しく感じら き嫌き物でスキーヤーのために考案されたとい 志質杯は、この山の内温泉郷の特産とも云うべ めの酒杯を手に致しました。魔主の先生受蔵の

としい御挨拶を申上 の殆ど初対面にもひ ら実に三十四年振り 年初夏川韓の例句会 てお棚にかかつてか 主幹には大正十三

を訪ねました。 「今日は楽焼の揮毫 私は近くの宿に一泊して歌めて七日の朝、 だ」と興

来たいように申されました。 初秋の信州らしくもないと思われ くこれから先き、 たでしょう。然しこんな年も珍 趣大いに動かされたかに見受けま した。この日もむし暑く御夫妻は 達者でいる限り是非何度も 番よい季節と申しあげまし 十月半までが信



分の眼を疑ってもみたい 耳に水のような御通知には聊か自

程でし

下水い間裏が信州を使みているので意を連れ

そろいで遠方迄の旅など御老体で でありますが、伝々から御夫婦お 州へ行く」と云う通知を受けたの

八月の下旬、主幹から突然「信

金

子

吞

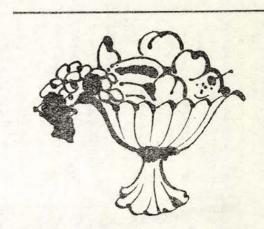
風

はどうかと思われたので、

この寝

路郎氏夫妻歓迎小集 (安代温景泉心庵にて) 前列向のて左より一金子春風・晦生海乃・陳生席郎・中島諸藤郎・ 後列一田中天美郎・山口解紅・古田東村・塩野久邦・武田崎声・改沢 平凡子・西真篤・金井有為郎の諸氏 写直提用 前列向って 後列一田中

思惑は倉庫を借りて寝かせとき 悪漢が出て来そうなり倉庫 おもわくがはずれ倉庫に寝たまんま 夏ものと冬もの倉庫で入れかわり 倉淡えとして売る 品 も 作 倉庫者二十年という顔に な 製木の倉庫夏を羨ま 戸も重いほど倉庫で歳をとり だんだんと迷のさびれを知る倉庫 豊作の村の倉庫が活気 値が上るまでを倉庫に眠らされ トラックの列ひと否みにした倉庫 物置きご倉庫とよんで小 商 人物は間違いは無 し倉庫



集

111 村 好 郎 庫

づき n 天悟空 東天紅 どんたく 升 男 更 銃声と倉庫を包む夜 倉庫倉庫倉庫無気 味 倉庫街裸電 盤の 灯 通訳もなれて港の倉庫

主并堂

鍋底へ倉並んでいる問屋

楽

たち並ぶ倉庫港にあ

惠二朗

誰が飲むのかピールとんとん積出され

結局はビールも飲めぬ鬼を終え

こみ入った話ピールの気が抜ける

御機嫌は髭にビールの泡をつけ 気の抜けたビールをドロが出してくれ 誘惑をピールの池でささやかれ スト妥結手打ちのビーのは会社持ち 夏季手当除々にビールの池と消え

代仕男

蛙康

在庫品大安売の手に釣られ 非常ベル故跡になっている倉庫 倉庫の戸昨日の臭いのままで開け 倉庫番の死街娼だけ が 米どころいろは倉庫が建ち並び 御先祖の夢が眠っている。倉 寄り添うて倉庫の裏へ来て停り 倉庫から倉庫へ虹が立つ波止場 ストックの原簿倉庫と喰い違い 名刺には資材部と書き倉庫 番 倉庫番ちょっぴり甘い汁を吸い 知り 史

> 伝票のことでもめてる 自庫 操短が倉庫係によく分り もう一度倉庫のぞいて夜警すみ 番 十九平 美音子

空っぽの食庫へストがまだ続き 空っぽの倉庫へ固定資産税 倉庫番鼠に 顔 を 覚 えら バイヤーへ他所の倉庫を見せておき 鍵かけたままで倉庫焼けちまい n 淀 昌 光 H 男 郎

路

現物を倉庫に積んである 強 気 葉 光

銀行に倉庫も開けて見てもらい 木

魚

税務署に内緒の倉庫みつけられ 倉庫から家重代が出るめでない日 万 女

浜 田 久米雄 選

ヨシキ これからはもう小便というビール 母ちゃんもどー。腹かと子に問われ 中元のピールわが家を通り抜け 観光バスビールの確にけつますき 生ビール白い帽子をかぶって来 ピールの泡拭いてまるなと電話口 家で飲むビールなんでか酔うて来ず 買収のためのビールと知らず飲み ピールまで飲まれチップもせがまれる 天悟空 山椒坊 庙 どんたく 子 佑 男 史

な港

句念坊

説教の途中ビールのグップが出 母子家庭ビールを買っているかられ 半分は泡に盛られているビール 冷蔵庫ヘビールを入れて朝を出し 勘定は課長ビールをぐっとあけ 乾杯ヘビール飲めないのが残し 米たビールあっちく回すことに決め ポスターとジョッへの池を見比べる ビーナツを見ればビールが欲しくなり 本のビールへ酔ったふりもして 宗太郎 兼治郎 陽 明 え 汀 也



過古、秘めて裸婦のモデルに強く生き

行

モデルから世界の美女が生れ出た アトリエのモデル芸術品のよう モデル嬢真夏へ秋を着せられる そっぽ向きゃずル仮面の肌撮らず

恵二朗

史 峰

モデル地区仕事邪魔な見 学

泡ばかり飲ませるように酌いでくれ 大ジョッキ真夏の昼の夢や佳し 大ジョッキ平気であける養子が来 遠慮ではなくてこばんでいるピー ビールきょう二号の不満聞かされる 惠二朗 美音子 古 旭 米 il's 年

うまそうなピールを飲んでいるテレビ お客さんらしいビールが露路を入る 口能へヒールの泡をのせて去に おれの子がピールの泡を飲みたがり ビールなら私もという娘に困り 弘 紀 水 甫 女 朗

割かんのビールの泡も逃すまい

ピール一本飲めぬ夫をたよりにし 圭 É 水 葩

末席はビールすかして酌いでくれ 和 郎

血圧へつれなくビール泡を立て

七 デ

水 谷

竹 莊

選

モデル村軸もおられば蚊もいない 女感書モデルになった旅 モデルになれる姿体を美やまれ アマカメラモデルの動くまま動き モデルもう馴れてカメラを意識せず 大胆なポーズへモデルわるびれず 悩殺をされてるモデルへ持つ絵館 いたわれば励ますモデルと意気が合い 行 定 同 庸 万 声 男 估 月 * 甫 女

> お父ちゃんじっとしててやモデルやで 裸にも馴れてモデルはイタにつき 眉のない顔でモデルは湯から出る 恋人は田舎に待っているモデル モデル住宅きようもアンテナーつふえ 小説のモデルになったとふれ歩き モデルではもう生活されぬほど太り モデルさせ亭主仕事に身がいらず デバートでモデルと妻をくらべて見 一応はモデルと同じ型に 決 たけお どんたく 同 保 淀 美 月 率 葩 明

頼まれてモデルになってやって馘首 画にならぬ画にモデル代はかり出し 商魂はモデル工場にしてもらい 蚊も蠅もおります隣のモデル村 特選になってモデルも嬉しそう モデルからカノラアングル教えられ アトリエのモデルを妻が嫉妬する 参無子 東天紅 主并党 魚 甫 交通もモデル名乗って事故皆無

花嫁のモデルになってまだ嫁かず アトリエを出ればモデルの顔でなし あの女モデルだったと指差され モデルからモデルが良いとすすめられ 刑 文 雄 峰

子を産んだモデルと見えぬ肉体美 問題のモデル訴訟をひきおこし 如才ないモデル画伯の肩を揉み 事実無根とモデルに告訴 化粧品モデルにされて買わされる よろめいて見たいモデルの今日の出来 カンバスはモデル楽しむ筆になり 施設の子ャデル校舎に目を見はり 曲線美商品にしてよく稼 フラッシュを浴びるモデルに汗にじむ され 3 句念坊 卯之助 十九平 穣 豊 爱 静 鳩 蚌

> この衣裳モデルは母に見せたがり 小説のモデル死んでから 判 あこがれた。デルになって身を削 新調へ妻はモデルのように佇ち よく書けとモデルの方が不平い 史 谷 子 月 **INI** 楽

> > モデル嬢をおだててカメラマンの腕 表情も変えず裸体となるモデル

孝 晃

風康水

モデルより少し美人に画いてくれ

モデル代無くて自画像ばかり描き

どんたく

客

きゅうくつなモデルケースにはめ込まれ 情熱をモデルに注いで落選 小説のモデルの名前子にもらい 又ードモデル阻んでてれるアマカメラ モデル今日絵になる最初脱ぎしぶり 芸術と言う目でモデルの裸体見る 姦通をモデルに書いて作 家 枝 郎

博

坐るにも歩くにもモデル意識する 泳げないモデルに海水着が似合い 我が服を通勤だけに着るモデル 小説のモデルにされて告訴もし 実物はモデルに形だけ似て ユニバースへ出る気モデルで磨きかけ 衣裳よりモデルに夫気をとられ 入選の喜こびモデルと分かち合い モデル稼業敷一匹も止ら さず 人力車明治のモデルで保存され 兼治郎 八九寸 宗太郎 美音子 繁太郎 明 鶴

蘭 TACHIKAWA PEN

扇風器がけてセーター着るモデル 大胆なポーズでモデルよく稼ぎ スタイルを気にしてモデルわざとやせ 美容院モデルと同じ型に モデルにはさせたくないと母強気 結 たもつ 圭井堂 雄 陽 7

ベストセラーモデルで揉めてまた売れる 愛してる人のモデルになって上げ 十九平 來 春

好きな柄貰ってモデル着て歩き

品質優良 大阪市東区常餐町一丁目十一番地 立川ベン先株式会社 カワピン カワ画鉄

言いなりになってモデルは目をそらし

モデル地区自動車徐行して通り

井 文

金

秋

韻をもつ言葉が自然の内に身についてい と言われ唯一つの言語を解し駆使する動 物である。特に日本人は七、五、三、の やすみなさい、で七、人間は万物の霊長 ばこんにちは、で 五、晩休む時にはお

宗教の話が出た。中でも改宗をすすめら

つい最近の事だが、町内の寄合で新興

ある。 子供が、七つ、五つ、三つになると、七 置いて育って行くようになる。七才から きが出来一応育つメドが付く時であり、 する。つまり七、五、三は人間として意 五才では一と先ず親の手を離れ、放って 義のある歳である。数え年三才は独り歩 五三の祝というのがあってお宮へお詣り 人間としての知識を付けて行く出発点で また七五三と書いて「しめ」と読む、

くれと言うと、いろいろとはなしだした れは、どう言う謂れがあるのか聞かせて が君の教会にも注連縄をはってあるがあ しい事を言いだしたので、それでは聞く い。或る日例によって説伏に来てむつか

してしまった。

を出され、あげ足を取られ、ついに絶句 が、よく知らないとみえて、次々と質問 うな事を言ってても案外ものを知らな

もへっちゃらですよ、あの連中はえらそ

私などはいくらうるさくすすめに来て

だした。

が咲いている内に一人がこんな事を言い れて困った話が一ばん多かった。話に花

れそれを韻のあるものに仕上げられて来 る言葉が多い、人間だけが言語を与えら が、我々文芸人としては仲々興味をそそ 説伏氏も二度と来なかったそうだ。それ 々有難いものだ(外国語の事はよく知ら た事を思うと、七五三も日本人として仲 も自慢話を聞いてしまえばそれまでだ 話の大要はこれだけだが、これでその

不朽洞会員

が太く端を細くし下へ蒿を垂らしてあ

注連は人間を容どったものであって中央

そこで、それでは私が言ってやろう。

る。これは人間が両手をひろげた形であ

も、またこじつけであってもかまわな この話が正説であっても異説であって

っても不思議はないのである。

だから、人間の形を変化さしたものを祀

そうである。つまり神は人間が創造した

奇数である幣を釣るすにも七五三と切る って、それも七つ五つ三つというように

ものであり、人間の心の中に神があるの

111

柳

不

朽

洞

會

(現在月

しからば七五三は

麻 生: 路

三、昼顔を会わせれ きたらおはよ、 うと、日本人は朝起 何を表わすのかと言

恒島井麻中岩田中白中 谷 生村崎中 村 助

上吉次 磯直愛辰祐朋守 二郎次勝二二吉吉雄 郎 三川若 小丸黑 正松 部摩天 本多久 場 西尾川 本 江

一特別会員一 木上戸奥中 島生 孤 翠普 丹

郎洞八作鈍雨乃郎健古迷介 浪光天路庵 太友長国吉尾福羽須藤白市築西井大三前 古寺 佐崎本砂岡山垣上坂輪間 団 豆満旋暁夢夢那晚 方妄

島 紫 真

いわ 紫水梅美好 林郎を鬼花香 子山蛙休堂正夢葉秋年風舟起風三水翠海 那伊金岩山菊吾小木平後佐真福木野田木河牟安石榎足河 小清逸菊浜桜布石北石大吉

藤野鍋田村村垣村村田 岡川 南立村 珊侃 梅白一丁水味方千瑞一 枝流 夏春日 水見沢田川施井川曾 小久 白灯松米不筑面奉民 谷藤井崎川田 郷西口尾 光茶**女**一阿さ 発雄賀 希 正会員一 明柳竿園雄水川人巣郎歩車 々峰志志水飘路堂平大

- 維持会員-

椙 水 山 山山益阿浜大有若長大服青福黄岸間 阿林西飯富山亀小野山大小 佐 增 杉 弘 水 尼 新 德 本 田田永形畑西働林谷森部 木島瀬 島 青 川 娯十 遊 鉄美南 丹 万野辻降岡根山林本口鶴沢野田谷津谷綠川永 谷葉鳥季貞一胡迷萊草 万甦竹白淡白晴文吞秋喜史 占民山慶荘助 春右司楽平星児秋柳子的光青香舟星峯月水花由葉

い、七五三と日本人の言葉の韻という点は、われわれ文芸人としては充分うなずは、われわれ文芸人としては充分うなずけるというものだ。勿論日本語の中にも一や二四六八によって出来ている単語や音彙もたくさんあるが、それをうまく組合わす事によって調子を整えている、一と二を継げば三になり、四と五または三と二と継げば三になり、四と五または三と二と継げば三になり、四と五または三と二と継げば七や五になる。六の場合は送り仮名を一字加える事によって調子がよくなる。路郎先生の有名な句に

及は定型主義者でもなく、また伝統派でもない。自然に出る言葉を自由に使いてもない。自然に出る言葉を自由に使いが盛んに叫ばれた事がある。現在もまだ跡を断っていないのだが、一体自由とは跡を断っていないのだが、一体自由とは跡を断っていないのだが、一体自由とはがなんに叫ばれた事がある。現在もまだ跡を断っていないのだが、一体自由とはのんだろう、言うまでもない言葉の自由であるのだろうが、実際に句を読んで見ると、リズムの悪いものや、七五三の調ると、リズムの悪いものや、七五三の調ると、リズムの悪いものや、七五三の調ると、リズムの悪いものがあまりに多過ぎ

るという。 言霊 (ことだま) の国に生まが正しく「哀別・離苦」 はまちがいであ

しい別離の苦しみだから「哀別離の苦」区切りかたに「哀別離・苦」がある。哀い人に安平次弘道氏もそうである。この歌者はすくない。区切りかたのむずかし

欄蘭氏の雅号を蘭と清記する一路集の

れ戸まどいすることばかりである。

(参考書「生きた言葉・生きた

文章」金田一春彦

る。自然に浮んでくる言葉を自由に使うる。自然に浮んでくる言葉を自由に使うれば、五七五の定形の句も、たくさん出て来てなんの不思議もないはずであるのに、使いなれた調子を除けたり字あるのに、使いなれた調子を除けたり字あるのに、使いなれた調子を除けたり字あるのに、でいならば、それは自由律と言うよりも、不自由律と言った方がよさそうである。

号美学

不二田 一三夫

ほうが句会で聞いていても心よい。 は「幽美子」というのが多いようだ。 優美の優より、幽霊の幽を使うところ に現代らしさがあるようだ。(奥床しく
新笹戸丸準松梁長酒不志坂伊木川清神永野永藤高高橋浜津藤松竹小森村馬松本下稲臼岡田岡野田川秋下見尾井田水田達村端水谷藤田松井橋崎本野田井村内池本上場川田山葉井田村回旭京東田水戸東東西北洋堰十鬼皇九弥身東明操雄幸奇太春万圭げ泉づ夢杜二清鳩林を藤子子楽甫花楼堂鳥平夫司男子悟酔峰郎平郎岸朗子声男童楼日古三お子る生的朗潮花坊潮波

石池桝宮岡山多中橋西岡池前菱小水加飯野中児野安杉中松辻西阿平和酒西武早小三土石池 坂戸本口沢田田村高尾部上川田浜野納田ペ島島口部本松岡田部井田田田部川倉村井居田 伊ほ九薫青三知左山乃口与柳郡 登神 一名柳雷高古 新桃蕗笛凡三な呂風一十恵文満牧水茶文美小呂迷立辰恒滄圭宏柳井志清一若清と風雷高古 雪村児生志男み平子路郎美字秋人茶花夫舟石志羊美一維浪水子太平子子栄薬生ち子山志心

中木杉傍米北岡森福大村林田魚石欄岸竹吉辻高樋野河徳光江大原本久仲林山野田梅西岡城谷山原島虫村嶋田町前上 中住倉 川内原 野口呂相永好国谷 多家ど 本田中木川野内 自む ラーニ デ 名可鳴旭昌狂満旅 「千紅溪じ舟鵜」鬼陽幽月独柳仕た葵立一眼宗 の 吾子二女馬字歩道人志恍童吳二潮風蘭蓮里月子な遊汀む美子谷都仙志男く丘児念子一晃子柳

藤伊門工模高谷田藤同小河宗植加森平野村村原永藤 津沢中村村島井高村藤下沢村山 梨明三甲紫徹好鳥メ虹ぎ雨寸遊繁愛保岬光 花林舟吉光也站雀女要す佑志子雄論美月輪 共学

大人

覚 2

批

判

n え け

共学の男子エ

チ

5

"

1

を

10

13

種

共学

は

男

0

V

~

n

少

L

1

位かさ

n

る 先

5

女

0)

7

学

生 ts

6

H

THE

ŋ

10

共学で な

学 か

校

を 水汲み

選

0

て

入

女

0 芽

優

L

< 0

ts 感

た

男

0 3

都詩子

10月31日→切「言いわけ」

意

見

台

b 7

20

祖

田

共学でならっ

た 0

オ

を

胜 图

共学へ白痴目

57

た

か

位

置

た

美音子

六才にして席を同じ う

す

3

111 6 Ł

な n

美 舟 共学 共学で 共学

を

明

治

0)

母

は

危

ts

から 結

ŋ

栄

4:

to

恋

から

実

を

U 子

共 学 課 題

共学が

内

域

娘 僕

K

L

て

な

かっ

す

同

学

0)

男

\$

雑

ιþ

縫

5

T

ŋ

3

乃選 麻 生 葭

> 共学にノート 共学のどっちもして 共 共 共 高校野球女生 14 学 学 K 0 0 男 男 女 強 ま 声 女 硬 3 徒 は 0 b 意 ŋ 黄 男 ま 意 見 佰 0 に る 女 識 U 子 カ L V 薄 子 る T 声 か れ か 応 を 6 = L 5 ゆ 援 H 借 2 ま 出 ŋ 奈良子 同 德 同 [50] 茶 子

共学へ 共学のフォークダン 共学のトップ ひらけてるようでも共学気 共学が私服で 会 K なっ H を 8 7 え 男 女 応 子の ば Z 子 摆 T から 15 派 步 K n 楽 握 手 L から 入 T お ts 6 2 折 5 n 10 7 3 同 良 同 同 花 子

6

n

る

茶 Щ 花

を置いて、カトーンという微妙な ると、静かさが、なお深まってく ず)といって昔、鹿や猪が庭を芸 になっている。これは添水(そう 石を打って素朴な音を出す仕掛け を振った竹が元へ戻るときに据え 水を竹筒に受けて、水の重みで首 庭におりてみると遠くひいた筧の 音が茂みの中から聞こえてくる。 だと言う。間遠うな音を聞いてい しにくるのを防ぐ工夫をしたもの 椽側に坐ってみると、ある間隔



本 水

配のなかに浸っていた。

山越しに妙高山麓の笹ヶ峯牧場

出る心算りで、

曇り陽の宿を出

湯槽に頭をもたせて、私は秋の気

(おたり)の温泉で、うすぐらい

信濃もずっと北へよった小谷

界に送った所である。 仙堂を訪ねた。石川丈山が徳川譜 代の武士をすてて、 梅雨明けの一日、 生涯を詩の世 京の洛東に詩

> を左へ左へ巻いて続いている、 が、道は行けども行けども山の腹 午過ぎには軽く峠を降りきる予定

山見渡すかぎりの紅葉である。

足の下は、

かさ高く散りしいた

何時の

気がする。 も、この庭までは這入って来ない 山の蒼さと、さすが京都の暑さ 幹の色のあざやかさと、奥深い裏 よく刈りこまれた植木の 敷きつめた砂の白と、

īE.

に、この音を慰めとされたのであ の木が蔭をつくっている、 手洗いのそばに、大きな茶山花 京でも

> みならされた小道がついている。 た。上りにかかる頃から、左へ路

なくなったが、生粋のいわゆる京 の婦人が静かに坐って茶を喫っし の盛をバックにするように、中年 くるように思えた。 そこから、サヤサヤと風が動いて 着こなした越後上布に調和して、 えない色のほの白さが、涼やかに 美人というのであろう、 ている。近頃、 ふと気がついてみると、この木 街では余り見かけ 何とも言

は曲って、

ただ紅葉の赤。

シトシ

右も左も紅葉の赤。

前も後も道

私には感じられた。 くる連想とのみは笑えない何かが るに違いない。爽やかな白さから の美しい人もきっと来て坐ってい た。そのとき、白い花の下に、こ 茶山花が白い花をつけた秋の頃 もう一度ぜひ来たいと思っ

ころ。

窓の外はまだ明けきらぬ山ふと

客

名木のうちに数えられる木だとい

間にか降り出した小雨に濡れて音 紅葉の葉が踏む人もなく、

をたしかに見た。 がえした女人を私は見た。 かに、朱の袖と朱の裳を長くひる の幔幕に包まれて了った、 の赤と黄が漲り舞うて、 に、上から横から後から紅葉の葉 めく紅葉の色のなかに、 風がサーッとおこるとみる間 辺りは朱 紅葉の精 そのな

赤ひと色に染まって音もない。 トシトと音もなく降りそそぐ雨も

でも歩いて行った。 に何処までも続いて、 音もない紅葉の道が夕闇のなか 私はどこま

紅

葉

吉・満秋・弦月・狂二・す、む・晃・十

虫聞けるだけが取柄という市営 共稼ぎする気住宅 申し

団地族木撒く庭のほ

L

込み い要 保険屋の離れを借りて這入らされ 青写真ここに嬉しい子供 部 住宅の留守防犯の札 申し訳程に生垣あ

主井堂

家建ててからの煙草はバットに

+ 勝 いのちある句を創れ



投稿規定 本社宛
本社宛
本社宛

本社 111 柳忌句会 (大阪市

会 9 月 場 12 日 文楽座別館四 午後 六 制

である。いずれ本誌へご執筆ねがうこと さだ。七日間の旅、信州みやげは一時間 にわたる主幹の熱弁に満場旅するこころ 宴会気分にひたる人もあるという明かる ろえない暑秋異変だ。旅帰りの疲れも見 せず主幹は早々と出席され句会部がマゴ つく有様である。 例の離れでは小唄のおさらいがあって 九月にはいっても暑さはすこしもおと

・保美・猛・勝・潮花・光輪・静馬・凡 薫風子・淡舟・井平・堰子・梅志・文秋 操子・芳子・与呂志・一三夫・生々庵・ 林・若菜・摩天郎・豆秋・亜鈍・いさむ 句の秋をむかえる。9時30分閉会(F) ・文蝶・和楽・紫香・多久志・一ン十・ ますます覇権の行方はこんとんとして作 者が発表された。吉田圭井堂・木村水常 になっているのでお楽しみに。 出席者―路郎・漂月・木堂・三司・香 九月の不朽澗杯は里田一ン十氏が握り 中島小石・小浜牧人の四氏である。 物故作家の冥福を祈り、恩師から新選

> 住宅難こんなとこにも人が住み スイートホーム歌う我が家も雨がらり

脯 狂

る

市

F

57

屋

六竜子

雄・メ女・樹峯・宏子・腹乃 遊・庸佑・梨花・ゆたか・半歩・いわを ・武助・阿茶・旅風・葉乙女・梅里・繁 悟・好郎・十四郎・南宗・奈良子・白柳 ・牧人・進之助・柳宏子・靖真・栞・舟

兼題 住 麻 生 葭 乃 選

共稼ぎ夢の住宅ま 住宅の心配 お隣りと物 老夫婦だけに部屋 階下土間にして住宅の値を上げる 橋一つ言葉も ゴルフ場真下に見える住 役得か住宅改造う わ 手も出ない高級住宅許り 住宅地寓と書かれ た 二 号 鉄筋が当り我楽苦多納まら 住宅はふもと炭焼 定年の遺算は家に 住宅と言えば長屋も品が 住宅の会社に勤め あんな男が土地を買い家を建て 勧誘へ住宅街をあ 住宅へ市場専用の バス 戦災の住宅難 かしや札貼ってた頃がなつかしく 新居建ち今は華燭を待つばかり いいら 干竿も譲る仲 遊 から う住 82 だ 11 てど ま 金. 雨 披 20 20 屋 建 + から 宅 た 続 走 あ た 露 ts 宅 0 か 漏 ず 宴 n ち 匨 ず < ŋ 生々庵 ー ン 十 薫風子 柳宏子 多久志 多久志 満牧阿 句念坊 奈良子 奈良子 椒坊 鶴

住宅難まだ恋人で逢いつ づけ もうこれで住宅に売る稲を刈り 住宅地ここらは昔 只 の サングラス道に影ない生 宅 栄転の社宅課長と 言う 構 都市計画うちの並びが間引かれる 衣食足らず住宅だけは親ゆずり 海の風入れて住宅 値 が 住宅のお通夜あっさり引上げる お掃除が大変ですと広う 住 み 二号邸も担保に入れて借る 話 ここよりは文化住宅バラが咲き チョボチョボのサラリーらしい住宅街 熱海から帰る二人を待つ 新 住宅に月賦ずくめでした 電 住む家が決まり式の日も決まり 住宅の向きを変えきす新道が出来 空襲の形見 住 宅 蔵 に 住宅がデッドロックとなった恋 住宅を三つに区切り後家を立て 市営建つ時村道 舗装 籤に当った住宅俺の手に負えず 住宅地ゴミの捨場で揉めており モデルハゥスモデルのような夫婦住み 洋風のテラスも付けて十 抽せんの公営住宅 住宅難押入れのない家を借 市営住宅場舎のように鳩かえる 新婚の道具京間へはいり 兼 腹のたつ貸れない家賃はかり建て 水が 高 ż Ŧi. 出 2 地 坪 居 化 ず ŋ n 一三夫 十四郎 薫風子 圭井堂 参無子 シナ 薫風子 梅 旭

兼題「いや味 須 崎 豆 秋選

会社寮ということにして社長住み

一ン十

いや味だけ別べ保証もしてくれていや味言ういっちのあこをきすり出し ほれている証拠いや味も涙ぐみ ヒゲ蓄てていや味たらしい顔になり さすが伯母いや味はいや味借してくれ 圭井堂 柳宏子

> いや味言い言い買う気かまだ値切り いや味たっぷりザー いや味とは知らずニコーコしてるなり 何ぬかすと心のうちで聞くいゃ味 文学的表現をしていや味 なり 今晩も残業ですかと先打た 年寄りのくせにいや味な金時計 礼言うてから嫌味やったんかと気付き とぼけ顔していや味言わはるわ 年の功しびれるような嫌味いい 妬いている証このいや味だとわかり 貸す方は兄へのいや味も添って出し 貸りたさにいゃ味こらえて聞いており 多産系かいなと姑のいや味なり いや味たらだら仏さんうかばれず いや味言うなと旦那笑うだけ いや味とは気付かぬはこのお人好し いや味ではおへんといや味並べ立て 角のたついや味黙殺した 紫 煙 悪友へ妻はいや味を並べ いや味言いに来たとは知らず酒さかな ほれている弱味いや味を笑って居 惚れきっていゃ味と知らずうれしがり いや味言うだけが妾しの抵抗よ だまってて聞けばいや味がまだ続き 仏壇の父へいや味を並べたて ちょっぴりといや味をふくの嫁をほめ 女房のいや味 ふんご聞き流し 聞き辛い嫌味へ一人立ち二人立ち 女房のいや味はいたいとこにふれ いや味言うても応えんロット惚れ 撫でながら小猫へいや味言いきかせ いや味いうてても好かれるとこがあり 茶漬サラサラ妻のいや味を聞き逃 いや味だけ言うて製成匠しもせず 刺青のいや味へ負けた奉 賀 淡 生々庵 参無子 いさむ 句念坊 香 柳宏子 六竜子 三美 南 光梅阿紫梅井弦南 志 蒙 真 悟 宗林輪志茶香里平月

兼題 放 送 松 ï 梅 里 選

社長訓録音にし 放送の献立庶民きく 放送はチボに注意もつけ 新婚は短波も聞いて寝つかせず 鼻たれがテレビスターにのし上り 井戸端の放送局で名が知 放送で患者を探す療 放送で老母も野球わかり 放送をちぎれちぎれに聞く歩道 公開放送拍手の中に僕が 放送も恋に泣く歌消しに立 放送かと思たらあんたの咽喉かいな スポンサーになって放送見逃がさず 寝転んで聞く放送も我が家なり 長屋では放送局の名で 通り 放送の耳学問でこましゃくれ 教養番組誰がきくのか長 放送のマイクへ降りた時の人 チグハグのままで放送時間切れ ああさよかさよかと放送聞きるらし 放送に出ても惚気を聞かすなり 放送で僕の意見はカットされ 放送をしたよにうわさひろけられ 放送に耳かしてい る 生 放送の割に売れ行きついて来ず 字幕にもない放送をふれあるき 溜息も一緒に放送してし ま のど自慢国では母が聞いてます スピーカーは無いが放送ゆきとどき 放送に似てとうさんのお人好し 放送権結局 金 放送も扇子を使うネッ ダイヤルを劇と野球が奪い合 相撲放送板場も客をもう 忘れ パートのマイクで知らす迷子様 い負けてテレビ246と変え チンコ屋の放送息をつかせない の三百六十五 0 て 事でも 一日歌 加え ト裏 U 送 一返事 k 養 か か 2 ち 80 香 圭井堂 与呂志 六竜子 旅 好 溢 旅 豆 梨十十四 花悟郎 参文旅 静 無 子 秋 風 馬 文 操 牧 和 井六竜子 香 司 風 郎秋二美馬 風 秋林鲍風 郎

> 気象放送あわてさせ気抜けさせ 声だけは美人アナウンサーで生き 放送の時間子役は待ち兼ね 舞台中継母はテレビへ予約する 泣き声を電波にのせて山はスト 市場行き留守はラジオが喋っとり 放送をする原稿は祕書が書き 場内でのお煙草をくりかえしくりかえし 忌憚ない意見とマイク追いまかし 目に見えぬ電波へのびてゆく文化 てんぶらを食べて放送しに出かけ 実況放送月がきれいなこともほの 宣伝カー南国土佐で帰って来 進之助 進之助 梅 梅 57. 蘭 樹

兼題「スピード」 黒 111 紫 香 選

こんな横町でもスピードを出す単 スピードアップローカル線はほつとかれ 電報は危篤特急まどろし スピードののろい男で恙がなし 駅前でスピード落ちた救 急 車 スピードに生きた男で早よう死に ジェット機の聞えた時は姿なく スピードを落せば客が気に入らず 追うちをかけて白バイメモにする スピードで豪雨を衝いた救急車 スピードに見ている方が汗をかき スピード違反こんとは勘忍してくれず スピードの犠牲を社会面 豊 スピードに借りた帽子を吹きとばし ヘルメット被ればスピード出す姿 スピードで読めば値打ちの出ぬお経 スピードを上げたとたんに突き当り スピードをよそに市電が走って居 か 柳宏子 圭并堂 圭井堂 六竜子 南 蛙 舟 梨 梅 雄 半水陽 旅 椒坊 坐

> すれ違う音もスピード出している ジェット機のあっと言うまに点となり 紫 + 一四郎 香

席題「生け花 若本多久志選

生花も遠い昔と子沢 留守番をたのめば花も活けてくれ マニキュアーの手で花をさし枝を切り あわれさを生かし七草壺に活け 祭り日の献花へ神 芒の穂活けて静か 生花展家元さんが 床の間が無い生花の 置 別人の顔で娘は花を活 やりくりの暮しと別な未 生 嫁き遅れ生花でめしも食える腕 花活けて三十娘の つ く 吐 生花をさげて娘になって 行 生花も枯れて失意の日がつづき 花の主そっとしておく交番 生花の腕も見合に見ても 青い目で見た生花のワンダフル 花活けて寡婦清らかに世に耐える 生花の師匠とやらで二号 生花の師匠とやらで二号 な松活けて大安迄をめでた が 生花のわりに会席さびし 草月流判ったような顔で 生花をやってまんねと横 通訳のいる生花へ 熱 0 な秋 から 無表情 5 3 す 座 息 3 ŋ 流 3 処 け 3 敷 帽 n 進之助 文 進 井 半 秋 助 平 歩 一三夫 多人志東 摩天郎 ー ン 十 梨 静 旅 豆 花 舟 子 秋 营 風

席題「あまのじゃく」清水白柳選

あまのじゃく裏をかかれたとは知らず あいつだけ本当に煙草止めちまい あまのじゃく顧問の役で封じとき 御天気が変るせあまのじゃくついてきた あまのじゃくやおら隅から起き上り めまのじゃく汗かいて飲む熱いお茶 しかし君やおら口切るあまのじゃく あまのじゃくいられと言えば貸してくれ 漂堰 三夫 悟舟平

蘭

特種の社族が干切れるほど走り 白バイがパックミラーを追ってくる 零コンマー砂縮めて 世界新 墨染の衣が飛ばすスクー スピード違反へ罰金もスピード

志人月

い風がくるとスピード嬉しがり

あまのじゃくと言われて汲もろいやつ しない気の寄付へごねてるあまのじゃく あまのじゃく損と知りつつ意地になり なぐさめられてあまのじゃくあわて あまのじゃくとわかり作戦立て直し 恋人へ面白がったあまのじゃく 天のじゃく天気予報を逆にとり あまのじゃくがおって折衷案も持ち あまのじゃくすぐ噛む犬を飼っている 傘なしで結局あまのじゃくが勝ち 腕のある職をもってるあまのじゃく あまのじゃくひとり茶漬にしてるなり あまのじゃく鬼門はやはりさけて建て 逆境に立てば落ちつくあまのじゃく あまのじゃく発揮出来ぬ日妻は留守 あまのじゃく妻には子供並みにされ 出世したらあまのじゃくとは言わざりき 雨降りになるとさこかへ行きたがり あまのじゃくただの酒なら飲むくせに お刺身は食べずじまいのあまのじゃく 否めないをとうとうあまのじゃくにされ 帳面なとこをあまのじゃくと言われ 多久志 梅生々庵 すい 生々庵 与呂志 豆 保 晃 秋秋美 美 to 佑舟

席題「コマーシャル」西 いわを 選

コマーシャルしつこいのんで覚えられ コマーシャル金は要らないように言う カナリヤのような美声のコマーシャル 秋場所へ二重写しのコマーシャル コマーシャルひとりよがりに喋りたて コマーシャル囁くように言うてくれ コマーシャルソングうっかり口に出る コマーシャルさも美味そうに飲んで見せ コマーシャルいらいらさせるチャンスなり コマーシャルだけで番組子は憶え フルベース目ざわりになるコマーシャル コマーシャル二死満塁をいとわな 子供でも明えるようにコマーシャル 抜け目ないレンズの角度にコマーシャル 弦南豆弦文 梨靖満生牧 月宗秋月秋花真秋庵人 ー ン 十 茶 淀川支部句会(大阪市

孝行な子は一人だけおれば足り だまっていてする孝行がまだ出来ず 新盆の墓へ不孝を詑びに 来る 孝行の出来る親ありありがたし

2チャンネルにしよかとあきたコマーシャル コマーシャル見せて聞かせて味あわれ コマーシャル考えて出す劇の中 コマーシャルみんな美人にしてしてい コマーシャル文字が大きくなって止み スィッチはもう聞き飽いたコマーシャル 審査する間をすかさずコマーシャル 新人をかつぎだ してるコマーシャル スポンサー値切っただけのコマーシャル コマーシャルソング配達帰って来 開幕をじらして長いコマーシャル ホーマーのどよめきを消すコマーシャル 庸佑清記 いわを 梅柳宏子 進之助 南 文香 漂 豆満 秋林 月

しなり支部句会(大阪市

岩をかむ怒濤の力ほしくな

ŋ

さきす

玉造支部句会

(大阪市

西出

報

七色のテープへ笑う波が 波の上ここにも子供住んで居り 波の間に泳ぐくらげのこと生きん 十代の波にさから う海水着 波を切るヨットのスリルへ少女いる こんな波ぐらいと五条高出た女房

詰将棋からくりあると知らず指し 勝っている応援の手がよくそろい 胸のすく野次に応援どっとくる 朝の陽へ父の枕に子の 枕もと治ってからの物ば 応援団ついでに郷土 の P・R か 後藤梅志選 ŋ

躰斜めのままで見る叩き 売り

倖せの朝はハッタイ粉の茶漬 倖せは風呂であくびをする時さ 倖せを見届けて去 ぬ 里 の 母 週刊誌浅く広くと 知 畿 読む暇もない週刊誌もち歩 逃げ腰になって値切れば負けてくれ 逃げ腰の子供へ花火火がつかず 逃げ腰で喧嘩口だけ勇まし 逃げ腰を口説きおとして連れにする 売 ŋ 10 句念坊 守 勝 文 秋

柳

月1|雑 阿倍野支部句会(大阪市)

松かさが賽銭箱の横に まつのきヤニでせみにけられないいいチャンス

落

行をしみじみ思い子を育て

満 舟

志子秋

夜のサレビ姑の愚痴を背に浴びる 勉強の邪魔とテレビは買えない身 テレビ買った当座はダイヤルさわらせず 見えすいたからくりそれも女なり 鉄筋の塔の真下のからく りょ からくりを解けば横領されて居り

六竜子 三舟 柳宏子 薫風子

、稼ぎテレビをおいた四

- 墨半

着流しで来る曲者の宵のう 受け太刀になって味方を眼で探 受け太刀と見たか相手はのしかかり 此頃は受け太刀ですと惚けられ 丸いもの丸いと言って世に疎し 書いた丸だんだんせばめ客を寄せ 金井文秋報 薫風子 一三夫

> 名残りの乾杯三回もやってくれ 冷水を見付けてうれしい峯仰ぐ 散髪に手間をとちせる名残りの毛 おばちゃんは船場の名残り捨てきれず 入墨の焼き跡御恥かしい名残り 冷水で一息いれて 話 し 出 逢引の名残りへ月がのぼって来 故郷の山へ名残りのシャック切り くせものが回虫だとは気が付かず 美智子 豆 子雄佑治秋芽

倉敷支部句会 (合數市

母の会みな親馬鹿な顔に見え

葉利陽旅敏

親馬鹿になって落ちつく家の夜 あばば出来たと近所中見せ廻り

カンバンの頃に常連額を出し 常連の横で小さくなって 飲み

常連の額へ高座の 眼が 空腹へ西瓜のたねがすべり込み

手土産の西瓜の汗を厚く 受け

礼ビラを見せてチップはくれず去に 海へ来て海の陽焼けを逃げ廻り 割引いて呉れても少し足らぬ銭 勘違いおしい時間を無言にし ロマシスと哀歌生んだ海 静 か 二三日冷酸つづく勘違 怪談へジリジリ膝を寄せて来る 割引をさせるに髭が邪魔をする 自殺者の心理がわかる夜 誠意まで割引させて腹を立 キッスまでさせたにチップ具れず去に あけすけな課長が部下に支えられ あればちのチップでホラを吹きまくり 相原 0 海 素身郎 風の子 隆 ン坊 月 文 風

小松支部句会 (小松市)

ままならぬ短かいこの世をすれて生き わがことのように気に病む思いすぎ 内職の腰が浮いてる上げ花火 僕だけになって休暇を出ししょり 苦労して借りて返す日すぐにくる 老らくの恋に寿命の短か すぎ もうチョット垣根の桃へ背が足らず 何時までも母は大人にしてくれず 一、三行書いて葉書も旅馴れる 伊藤茶仏報 みざり葉 味 茶 吉 光威智 桉 III

]][維 堺 支 部 句 会 (堺 市

専門家と言わぬばかりの憎い額 うっかりと零を忘れた専 専門家町の打ちようでも 朝寝とも縁をきったり新 美容術とかで娘はまだ寝 世界地図ここらは黒い人が住み 日本地図拡げてあちこち廻る夢 この辺の空気うまいと専 地図書いて借金取にやらされる 門門違 てま 箕僖子 貴圭庸鯉保摩天山水佑子美郎 箕僖子

木次支部句会 (島根県)

愛情は小鳥も知ってる肩 延長戦テレビ喫茶は儲らず 道ならぬ恋逢引きに気がつかれ 勝ちそうな将棋うちゃの風を入れ ぽんやりとテレビ見ている旅の雨 テレビが有ってお隣りは繁昌し 小鳥飼うて孤独のひまを慰める 0 藤井明 朗報 登美代 迷調子 治美朗夫

鳥取支部句会 (鳥取市

土用波元海 返す波寄す波海も生きる 珍客の好みも聞いて冷やっこ 四海波出ていずまいをなおさせる 硝子器に盛られて夏と言う味覚 すいとんにしてうらなりを役立たせ 夏料理ここもトマトと胡瓜なり あの男何処へいっても波を立て 軍の 腕 を 見 河村日満選 * 由多可 多可志 星 民山

大阪市民文化祭第11回川柳大 〆切です。 会の兼題投句は十月十日着限

京都支部句会

喝采のかげのつらさは秘めたまま 唇の泡も美し女とビー 横額の鼻の高さすれちがう じっくりと車中大鼻見つめられ 日本人鼻の低さを 愛 酔うつもりかなしくビールこほれおち 屋上に生ビールあ り 下 鼻声も武器としったる女 なり 鼻の下伸しきれないふすま越し 遺産悲し喪服にきれいすぎるひと くらげふとなんと醜き人の額 よう唄わぬのに喝采に追い出され 喝采の中の汗ふく人となる しあい 通る iv 美佐緒 句念坊 親 礫 亀 司 絵 角 捗 郎 牛 雀丘

西宮支部句会(西宮市

なにもかも娘案外知って

おり

若本多久志朝

風に子の影母の影が揺れ

世話好きの眼にお隣りはらう二十 川風にふかれ妓はくどかれる

川風にバタ屋一杯

窓を

開け

風に五十のゆかたもまじってる

風に祭ばやしが聞えてき

史

近道に不義理重なる店が

あり

けちんぼはけちんは同士仲が良く

風にふかれ未来を語りあい

一庸鮎 施占

悠々自適残り少ない 夏休 み盆踊り見合い気取りの娘の 子

近道を知っている方が酔いっぷれ 近道をさけて今宵はランデブー 近道はわいろわいろと数えられ

夏休みも最後だからとまた遊び

四瓜番遠く眺める 団

地

0

貴しのぶ

広島支部句会

(広島市)

その昔嫁台所で泣 先生の苗字がかわる 夏 すねている音で無 台所なすびの色で今日も明 ボーナスをつぎ込むうちの台所 喧嘩分けに母の疲れる夏 台所夏の オイ酒だ返事はし 米て三日女中が 台所目出度い夜の百 めしだけはたけまするすの台所 台所個性のまま 台所もう愛 味覚 人を思 つに要 の鯛 言の を刻 とく V 握る台 ワッ 台 光 休 むの台 ts る 所 1 35 所 摩天郎 太郎 助

> とりあえずうどんをとってあしらわれ 箸つけぬ客の遠慮が気に入らず 口説かれる膳とも知らず箸をとり 割箸の袋がメモのかわり をし 箸箱も夫婦で入れる仲の 良 手の平で受けて酢和えの味をほめ すき焼の味より先にいい 匂 味のある所で中座して帰 どてら着て歩けば宿の名で呼ばれ

3

水 浄

仙

宿題へ無学の父はそっぽ 宿題へ新旧教育折り合 宿題は母に任せて草 宿題に親の頭をテス

向 わ

句念坊

ひとみ

舟

伊久野流

万

言い訳の出来ぬ指紋へ首を垂れ 言い訳にしどろもどろの発養子 言い訳は言わぬ積りでべれを押し 宿題に家中智恵をしぼら

され

を持

董

なり 切

ちとせ

ŋ

0

旅

柳風子 久米雄

好い星の下に生れて世を知らず 万一の覚悟はして る空

篠山支部句会

中元が近く砂糖の値が 三度目の乗り越し顔を覚えられ 乗り越しに千円札でつりを取り 凉み台の話がとぎれた流 れ 裏口へピールの瓶 置ごたつ廊下のすみで夏を越 から 並 (兵庫県 Ŀ Si ŋ

> 植付けがすんで予約の俵を読み 親の知らぬ間に婚約をした長女

は計算外の予

山茶花

海電鉄川柳会

(大阪市)

勘当の子に差し入れも

親

静 七 面 江 山 世 女

人院の予約へベッドの大 掃

除

かつみ

遭難へ我が子の奇蹟信じ 善人の言い訳独り 言に 言い訳の孫へ始が 肩

利用されてる親

足や手をかき掻き うれしさの余り相手をつい忘れ 快方へ今日もうれしい足が延び 釣り上げた顔は恵美須にさも似たり 足裏の痒ゆきお行儀もて 余 し 抹香のしみたお菓子を貰うて来 本職はサラリーマンで寺を守り 山門をくぐりお酒の名が 変 り うれしさをうしっ姿に見せて行き 嬉しさを涙で答えるユニバース お寺の子ごつい名前をつけられる 続 く立語 小西無鬼選 岳凡枝み澄 詩志葉る代 可左文字 ひ岳凡枝か計志葉 孝

> 沿線図競争 路 沿線は黒潮おどる 沿線の我が家横目

線

書き あり

で乗 細崖

\$ <

のぼる

進

沿線の催し電車こ ま す だ け沿線に温泉何日の間にか 出 来沿線に温泉何日の間にか 出 来

宏武梅新貴句狂 子助志石山坊二

沿線に住んで疎遠をなじられる 通勤もなし風車がくるくると

治線のよしみで悪酔見すてか

どしゃ降りの中で捨猫鳴いている 川風に岐阜提灯がゆれていき どしゃ降りへおろしてバスは後も見ず けちん坊二度目の妻も居つかない 黒枠になってもけらんほまだ云われ 子を二人連れて娘が甘えにき すいむ 修 牧 多久志 児 美

中鳥 雀報

さい銭もあげずけちんは鈴を振り 浜寺支部句会 (堺 iti

備前支部句会

三村柳風子選

休みの子の宿題をもて

すみ子

トち

原

野

舟子児

(岡山県 美

> 寺の寄附ポンと投げ出す齢となり 夏の夜を寺の碁石が帰さな 遊らんの一歩へ見張る本願

> > 万凡

月世志

弓削

支部句会

(岡山県

十年の知己手ぶらでも又楽し ずけずけと云える気安さうまが合い 週刊誌クイズへのぞく目を感じ 平田越 2 升報

おしほりにマダムの匂いついてくる川風へ むし暑い夜を 誘われる

手拭で西陽を避ける甲子園 どしゃ降りを見下しているどい動め ママに似てこの娘も百貨店が好き どしゃ降りをしばし眺めて傘をあけ けちんぼもえべっさんには寄付してい けちんほと云いやと祝儀袋だし 舟渡御に風が止ったむし 暑 さ

黨風子

川風にまむしの匂う戎橋

二上越 芸利舟

悪友が我子であると威かされ 週刊誌みやげに出張から帰 り 週刊誌忘れたふりで置いて降り たけし 方 文川

お寺さん内職あるらしオートバイ

朗らかに座興も見える三等

三等車ステテコのまま靴をはき

憲

次夫坊司

二合版ラッパ飲みする三 等

車

三等車旅馴れた人目をつぶ

気安さは長屋を乗 ゼ 三 等

車

帝化新人会

ハイテーンお尻で割込む三等車

善之助

恋心茶煎の泡に託

L

2

京

一楼

サービスが泡となりたりノーチップ

泡をふかすつもりが泡を喰い

憑

沿線で会えば保険の名刺くれ 路 郎

明和

JII

柳研究会(西宮市)

大阪逓信病院川柳会 (大阪市)

姓娠までさせたとなれば親 もおれ 暑さにも負けず婦人科繁昌 姙娠服あれで隠しているつもり 姙娠で見て居られない程あまえ おめでたで旅行中止と二段ぬき 悠々と産婦が降りた救急車 無料やから一一九番へかけてみな 大役と云う姙娠を肩で耐え 冷蔵庫にたよりすぎてたいたみょう 猛犬にチビ逃げ腰で吠えまくり 逃げ腰へ座布団を出しゃ茶を出し 急救車ブレーキかけた牛の 尻 一階借りで孕み別れて育てあげ マイシンと西瓜の雑居開業の冷蔵庫 橋本幸男報 比呂志 よしを 路 風船堂 巣 牛 葉 男

潮騒の泡は人魚

八魚ふと思い出す 八魚の歌皓

雨乞いの様に蛙が ゲゲゴゴと 蛙 只

才なく

ひろし

中傷の話になって声

が落ち

野々口美舟報

陽

đ

JII 柳 会 (大阪市)

面当に相談欄を読

まされる

善之助

(羽曳野市)

ばんやりのあたまでかきつけひろけてみ どん底の暮しへダリヤ赤く咲く ぼんやりとしたのが兄でございます 結納は言わず洗濯機が足りん 中傷もせられて離縁の娘が戻り

ちとせ

世

参観に来て衣装をみてか え り

鮨と料理と酒

千日前 大劇裏アベノ橋地下映画食通街

か

け

郎里

よしあき

吸

スピードのスリル違反をつい忘れ 中傷が入って二人は強うなり 死に水もとらずに山の灰になり

素古平 山彦子

ばんやりに見せて急所を突いてくる

江舟

堂

水

佐野白

水報 甲子朗

物思う夜のジョッキが手に冷ゆる BGの男も額負けするジョッキ かりそめの恋はジョッキをあけただけ 優勝へ特に許した大ジョ 脛ほろろ狂女の素足艶め たわむれる素足の 先の 鮎釣の素足が初夏の陽へ 持ち味のまま玄関 未亡人素足を見せてからくずれ ョッキ拭く少女淋しい目鼻だち " 桜 白 V. 貝 すみ江 甘 弦 月 路 綿

333川柳会 (堺 市

色っぽい場面は映画影になり

好 孝

平祐夫

夕影の河岸の河鹿の声が さえ 面当ての宵寝さっぱり寝つかれず 面当ての自殺致死量まで飲まず 面当てに後の縁談とり急

嫌われても影のようにつき纏い

快談がへべれけになりあと喧嘩 快談の席でちょっぴり妻も酔 快談を記者がメモする程の地位 階段を降りかけ酔っていると知り 新入社狭き階段意識する アパートの子は階段へ来て遊び 電報へ階段一つ踏みはず 階段の途中の噂に降りられず 両親の快談ちょっぴり叱言まぜ 川村好郎 句念坊 報 郎宗声石山楽

うたたねをさめたら月が覗いて居 独り居の夜にもなれて 先客の呉れた土産を出して置き 腰上げたまま先客はまだしゃ~り 八魚追う夢にも似たる淡 々と月 のひ 今 0 鳴 土 È が 恋 首 佐 蛙 樋口舟遊報 き 始 愛 聞 の照 飾 < ŋ 海 薫風子 すいむ絵 幸 夢 泰 山牧 青 半 舟 友 さて金となるとでしゃばり後へ退き 現実の壁に理想は崩れ 出しゃばりをにらむ片目に気が付かず 給料日倍額 でしゃばりの気のすむようにさしておき サングラスかけて夜店をのしあるき 所詮女の理想やとたたまれ 外遊へ首相笑顔の如 出しゃばりも時には出雲の神となり 虫干しに祖母の眼鏡を孫がかけ 理想ばかりの政党で票の び あの人の理想の夫てあれかいな 齢四十理想に替わるリアリズム 平気よとそらす瞳は妬いており 給料日ツケを返してツケで呑み 北浜の動きもしゃべり医者は去に 理想など夢だと夫 婦 恙 正直が父に似てると馬鹿にされ 給料と背広が合わぬスネかじり 羽曳野川柳会 やばりも自分の恋はままならず 論で花が咲

33 曳 野 句 会 (羽曳野市)

待つ人も待たるる人も傘を上げ 螢火のような夜汽車の灯が遠く 北斗七星に話しかけたい夜の汽車 夜の汽車食って寝食って寝るばかり 手に汗を握ったところで時間切れ 舞台裏役にはいった顔で待ち 子の笑顔瞼にしか と 出 額のきく筈の飲み屋でマダム居ず ひやかされまんざらでもなく赤くなり 上品に食べて西瓜のまずいこと 車座になって西瓜の切りが減り 西瓜切る手許みっかる子のはしゃぎ 子の数に切れば西瓜ももたれ合い 電報 大戸をあけさすに一 苦 労 動 太田帆舟報 のぼる あきら 田可子 天悟空 幸 尚 ひろし 吸 童子

梅

里

0 店

締切・十月十五日兼題「窓」 投句は阿倍野区松発表・十月廿一日

(第百四回) を募る

路郎先生選

句数五句以内

(店内揭示)

のぼる 天悟空 陽童 史 邦 一人降り一人が乗った夜の汽車 盆と暮れきっちり義理を立てに来る 電報を以下同文で 片 附 ける 電報を電話で受ける儲け 押売りじゃこざいませんと坐り込み お迎えも一本傘の仲のよさ 忘れ傘役に立ったよ たけるベ川柳会 俄 (岡山県)

好梅摩保雄郎里郎美三

穣尚 我

なく

そのままに写った顔で気に入らず おごらせるつもりで入ったビャホール 許されぬひとと夜汽車の隅へ乗り 護送さる被告に夜汽車の灯が暗く 仮汽車待つ心は故郷に早や帰り 雨 保維穣緑凡 一帆 浪吉歩舟邦

川村 郎選 田可子

10 句 月 0 슾

所題時	所題時	所題時	所題時	所題時	所題 時	所題時	所題時
第30日(金)七時 好奇心・影響・夜長・エッメール 好奇心・影響・夜長・エッメール	29 日(木) 六時半29 日(木) 六時半入場券・暗算・非常口大場券・暗算・非常口	現市老松町三丁 島野工業KK 場下・うぬばれ・規則	探 句 会 日	21日(水)六時平気・ブーム・秋刀魚	玉出新町通一ノ一一後藤梅志居別離・鼻唄・サーカス 日 日 (日) 六 時	市電玉造南百米 大阪信用金庫 調子・不眠症・剃刀	十三西之町 東淀川郵便局大空・総代・くせ 大空・総代・くせ
場《	所題時	所題時	所題 時	所題時	所 題 時	所題時	所題時
場は明確に書いてください。 ――編 集 局	備 前 句 会 備 前 句 会	西宮句会 日(金) 六時中西宮駅北出口スグ 労働会館	四条縄手 仲源寺四条縄手 仲源寺	明和研究句会 墨・唇・肥える 墨・唇・肥える ・肥える	米子市公会堂 日本間 サ学・お目出度・小言 サ学・お目出度・小言	倉敷市水島弥生町四ノ三一 倉敷市水島弥生町四ノ三一	小松 句 会 2 日(金)七時 失敗・開店・雑詠

物語」も本号自慢の読みも る山路閑古氏の「川柳今昔 でいただきたい。 うが書きよいようである。 定した数が集まらなかっ ギュラー・メンバー東野大 のである。伊志田孝三郎氏 この社でも共通した願いで ▼評論がほしい、これはど た。やはりクダケタ題のほ ▼特集「個性と私見」は予 せまるものがある。 は実話だけに、なにか胸に ハ氏、冨士野鞍馬氏は云わ りもがなというところ。高 @亜鈍氏の「鼻の内輪話 ・巨匠久良伎と一問一答す 「句境近況」も佳し、

> る。勉強してください。 読者がつくるものなのであ 人古豪を問わず、いつでも ある。いつも言うように新 ベルというものは、それは ていただきたい。雑誌のレ るからドシドシ力作を寄せ ベージを開放する用意があ

された意義は大きく

▼先生が信州へ旅を

まず健康に自信をも

たれたことは、測界 にも大きな安心を与

うのだが、「選がきつい 自身もよくボッになるの り抜いてくれない。すこし 出して三句、それなのに 出すと五六句、某一流誌 というのである。地方誌 のお便りをもらって面食ら ▼ときどき次のような意味 雑の一句を誇る、と。 とは価値がちがう。厳選川 もこう思っている、金と銅 ではないが、ボクはいつで で、その気持ち、わからぬ れという抗議である。ボク は投句する身にもなってく 川柳維誌」は毎月一句よ

しの

はもう秋が来ている。さわ

ベージをあけると、そこに ▼主幹の、「奥信濃の旅 にしていただこう。

やかな十月号を静かに読ん

りである。目次を見ていた

え、ウンと力を入れたつも ▼読書と作句の秋をむか

しびはないであろう。

以上の力強さとよろ れ門下としてもこれ えたし、またわれわ

かるが、その採点は皆さま だくと、編集部の動きがわ

ビでやる、と鼻息が荒い。 どはカメラの光輪氏とコン ら、また走りまわってシリ ▼潮花氏が次号あたりか 待願います。 いとハリきっている。ご期 ニュー・スタイルでいきた ▼柳界の異色、川雑婦人友 一瓢氏も「句評リレー」を ズ物を書くという。こん

った。 ▼月世界征服より、小店が とこないのだ。 だが、どうもボクにはピン がひっくり返るような騒ぎ 月十四日六時二分二十四秒 阿茶理事長の弁である。 よいよ世界的やわ」とは、 ムズにも採り上げられてい 新聞にも紹介されたが、こ が、ボクには重大記録であ 類焼にあったことのほう 到達した。一九五九年、九 ▼ソ連のロケットが月面に んどはハワイのハワイタイ ぬご心配をおかけしてしま の諸先輩に、なみなみなら った。先生を始め不朽洞会 ーだそうである。世界中 (二三夫)

社の黒板

日)で左の諸氏が新選者に 推薦された。 本社川柳忌句会(9月12

水堂 (大阪市) 中島小石 (大阪市) 小浜牧人(西宮 吉田圭并堂(堺市)木村

れた。 りで支部長を辞退された。 後任は浜田久米雄氏が就任 楼氏は老齢のため九月末限 ▼川雑岡山支部長津田麦太 市雑賀町十区八の四に移さ 氏が就任され、支部を松江 ▼松江新支部長に梶谷冬牛

訪の森の小石居で開かれた の会の五周年記念の会が譲

(九月二十日)さきに毎日

岩本多久志編 登載された柳人三百余名、

上送短暂

大阪市供省局区内

生 路 郎 著 好

川柳の味い方・五百数十句

評 噎 Z

麻

二五〇余頁 上質B 6版

食品と原材・機械・包装の総合誌 10月号発売中!! 100円 (〒6円)

醬油屋は保守派の牙城 特 醤油の現状と今後の方向 ソースの需要は伸びているか グル

醇は
日本が

誇る輸出

食品

> 乳酸菌食品の現状と未来 ソフト酒は売れているか

海外 清報 令特許告知板

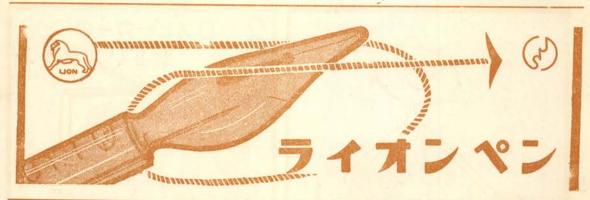
[展望台]主食・缶詰・菓子・酒瀬・香料等

食品と科学社

台風15号被害地皆さまに

謹んでお見舞申し上げます

柳 雑 誌



printed in Japan

行印配人

十九

七二〇円

大阪市任市局区内为代西五丁目二五番地 大阪市任吉屬区內万代西五丁月二五幂地 月一日発行 列5号 毎月一回

住所氏

近作 文川 (義辞十句以内) 麻北麻集 生川生 基路春路

> 郎巢郎 選選選

末精物課 (十起以内) (十切以内) (十句以内) 菊河丸 金山長集 平田村尾 2 井根野 早か日潮早文白文

懲満自

行筆古

不

募

集

不眠。

日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠 ができ、日中のイライラや不安感 もとれ、明朗・能率的な生活を送 れる習慣性のない安全な新薬です スッキリした頭で作句の為にも!

畫はすつきり。夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

疲れをとり 抵抗力の強い からだをつくる

高単位綜合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-5

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円





